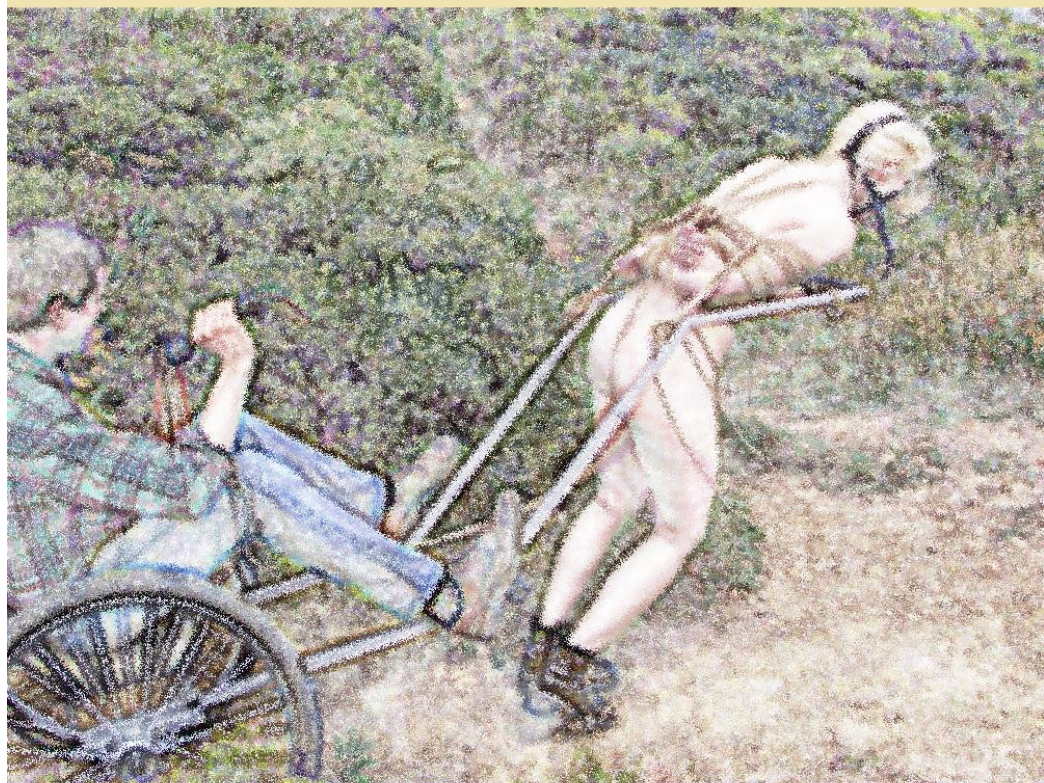


# じゃじゃ馬娘調教牧場

蕾の悦虐 リクエスト作品



原案:WILL

小説:濠門長恭

## 目次

がさつ少女のなやみ事.....	- 3 -
義理父の強カン未すい.....	- 8 -
ポニー少女と使役ロボ.....	- 15 -
身体検査と性器ほう合.....	- 21 -
先ばいたちの調教風景.....	- 38 -
夜毎の務めは性ドレイ.....	- 58 -
本物子馬との共同生活.....	- 81 -
ジョッキーの訓練風景.....	- 87 -
クリ責めと2穴の調教.....	- 99 -
ポニー少女の基そ調教.....	- 111 -
荷役ロボ少女への調教.....	- 121 -
ジョッキーの基そ訓練.....	- 130 -
強制快樂調教にも反発.....	- 148 -
過こく調教アラカルト.....	- 155 -
精神的マゾへの目覚め.....	- 172 -
全身アクメで完全降参.....	- 182 -
死んだ目をしたお人形.....	- 195 -
調教成果のおひろめ会.....	- 208 -
お父様のいびつな愛情.....	- 237 -
お父様にささげる処女.....	- 248 -
後書き.....	- 256 -

註記：この小説では、固有名詞以外は教育漢字のみを使っています。あくまでもリーダビリティを考りよしたもので、他意はありません。

漢字を制限したために、当て字を多用しています。「民事会入」「感ちがい」「着変え」などです。「暴発」は、文脈によってはバクハツの当て字の場合もあります。

なお、今回は「わざと」の表記ミスについては傍点を付けません。「くぐすったい」「シモロドモロ」などはロリインも分かってて、わざとやらかしています。ロリインはうっかりでも、筆者がわざと——というケースもあります。パニックの心理描写などです。

「オレはパニックった」なんて言ってる時点で、パニックではないですからね。

「ちもき、いいよおお」なんてのがアクメの台詞なのと同じです。

「うっかり」なのか「わざと」なのか、読者各位にて当て推量してください。

その他の間違いとして、アヌス（名詞）を使わずアナル（形容詞）に統一していますが、これは現代日本でも頻出している誤用です。まして、40年前においてオヤマアです。

なお、申し上げるまでもありませんが。

この小説はフィクションです。登場する人物、組織、地名、事件、年齢は架空のものであり、実在する如何なる事象とも関係はありません。

## がさつ少女のなやみ事

「進学したら、下着は白とかソックスは無地とか、校則がうるさいのよねえ」

「セーラー服はあこがれちゃうけど、オシャレは楽しめないから」

くすは 葉ちゃんの意見はもともとだけど、黄世音ちゃんのは「？」だぞ。

「今だって制服なんだから、同じじゃないか？」

「ちがうよ。リボンは自由でしょ。ブラウスだって、決まりがないもの」

そんなものかな。オレには分からないてか、どうでもいいや。

「マイちゃんは、今のヘアスタイルで問題ないから、いいな」

マイてのは、オレの呼び名。

「そだね。ショートボブだもん。私なんか、こんなに長いでしょ。かたにかからない長さ  
に切るか、オサゲにしてもセーラー服のエリまでだもん」

かみは女の命って言うけど。うっとうしいだけだぞ。なんで、こだわるんだろ。

そんなことよりも……今日もパパは出向かえてくれるのかな。

ううう。くぐすったいぜ。母さんのお願いだもの、守ってるけど。オレは本当の父さんがだれかは知らないし。でも、やっぱり、『父さん』って呼ぶ気にはなれない。ほんととは、せいぜいが『<sup>いくと</sup>郁土小父さん』なんだよなあ。でも、母さんに「いつまでも他人行義はだめでしょ。お願いだから、せめて『<sup>ぱぱ</sup>パパ』と呼んであげて」って、言われちゃった。そして、もう……「いやだ」とは絶対に言えなくなっちゃったもんな。

母さんは2年前に<sup>らいどう</sup>礼堂小父さんと結こんして、だからオレも<sup>しょうだ まいこ</sup>召田 舞子から礼堂舞子になった。そして、母さんは去年の暮れに入院して……3月に死んじゃったんだ。手術もできない進行性の胃ガン。もうすぐ21世紀になる（今は1985年）っていうのに、まだまだ不治の病ってのはあるんだ。

すげえショックだった。でも、学校を休んだのは初七日まで。めそめそしてちゃ、天国の母さんが心配するものな。

パパだって、オレがふさぎこんでるんじゃないかと心配してくれる。ていうか、かまい過ぎてくれる。朝はオレを見送ってくれるし、帰ったら出向かえてくれる。パパは会社をいくつも持ってるけど、社長は部下にやらせて総カントクだけしてるから、時間は自由にできる。けど、仕事の電話がしょっちゅうかかってくるな。

電話がかかってくると、悪いけどオレはホッとする。なんでかというとな……

「ねえ、舞子ちゃんのパンツってどんなの？」

はへ……？

「やっぱり、話を聞いてなかったんだ。進学したら、下着チェックとかあるでしょ。これも、今のうちだけかなって話なの」

「あたしは、水色の横シマだよ。おとなっぽいでしょ。葉葉ちゃんは、ピンキー・モモだって」

オレ、何だっけ？ 覚えてない。ので、確かめたら。

「きゃっ……男子に見られるよ?!」

これが、分からないんだよな。水着とどこがちがうんだろ。そりゃ、ブルマからはみパンしてたら、格好悪いけど。

「オレ、白だった。でも、ここにリボンがあるから、オシャレだろ？」

「ダメッ！」

スカートをめくって、おへその下の赤いリボンを見せてあげようとしたら、すごい勢いでスカートをおさえられた。

「ほんつとに、もう。そんなだから感ちがいされるのよ」

「……？」

何をどう感ちがいされるのか分かんないけど、とりあえずスカートは元にもどした。

オレって、ガサツだとかオトコ女とかよく言われるけど、オシトヤカな女の子になった

くもない。でも、まあ。あまりガサツだと女子から愛想づかしされるから、オシトヤカは無理でもオトナシクしとこう。

スクールバスを降りると、いつも通りにハウスメイドの<sup>よどいあすか</sup>淀井明香さんが待っていてくれた。  
「おかえりなさい」

オレはとっくに観念してるから、おとなしくランドセルをわたした。1年生じゃあるまいし、お出向かえなんか要らないっていうのに。母さんが元気だったころは、ふつうにひとり家まで帰ってたのに。こいうのを過保護っていうんだぞ。でも、まあ、これくらいの過保護なら、がまんするけどさ。

「ただいまあ」

「おかえり。今晚はカレーだぞ」

パパに教えてもらわなくても、ばか広いオヤシキのげん関口までにおってるよ。母さんのと同じにおい。なのは、カレールウが同じだもの。でも、味はちょっとちがう。明香さんのは、ファミレスのカレーっぽい。これはこれでおいしいから、いいけどさ。

「宿題があるから」

ととと2階の勉強部屋へにげこんだ。

実際、うちの学校は宿題が多い。とにかく、1学期中に教科書の最後まで進めようってんだから。そして2学期からは、進学後の予習。

4年で転校して来たときは、周回おくれを走ってる気分だったな。とくに英語の授業なんて、アイアムアペンだぜ。

牛のシッポになるよりニワトリの頭になれってコトワザがあるけど、オレなんかシッポからぶら下がってる。でも、ふつうのドリルなら80点は取れるぞ。先生に言わせたら、あんなの100点未満はゼロ点と同じだそうだけどさ。牛のシッポはニワトリの頭と同じくらいの高さってこと。

「舞子、ご飯だぞ」

明香さんは帰っているので、(義理の) 親子水入らず、カレーだから水は要るけど。

うげ。福神づけじゃなくて、どろっとした緑色のピクルスカ。好ききらいはしないけど。

「ごちそうさま。まだ宿題が残ってるから」

「食後は胃ブクロに血が集まって、頭が回らないぞ。もうすぐ、舞子の好きなアニメが始まるんだろ」

ということで。パパのひざに座って、いっしょに見た。

頭ナデナデとか足をスカートぎりぎりまでサスサスとか、スキンシップをやつがうっとりしい——なんて思っちゃダメだよな。

昔からこうだったけど、ママがいなくなっからは増えた。きっと、オレが悲しんでると思って、なぐさめてくれようとしてるんだから。

テレビを見終わったら。

「おとつ日も昨日も、パパが先に入っちゃったね。今日はいっしょに入ろう」

パパができてから、ずっと続いてきた習慣。母さんとパパと3人で入ってたときは楽しかったけど、ふたりきりは、はずかしいかな。だって、父親といっしょに入浴してる子なんて、オレくらいなもの。

でも、ママが居たときと同じに生活が続けたいって気持ちもある。

「いいけど……エッチなことはしないでよ」

すこしふくらんできたなとおっぱいをつまんだり、まだ生えてないのかオクテだなんて、マンマンのまわりを指でなでたり。

「ヒヨコのくせに、何をマセたことを言ってるんだ。そういうことは、<sup>まその</sup>麻苑の半分くらいはボンキュッボンになってから言え」

まあ、のっぺらぼうの丸太ん棒を相手にエッチなことを考えたりはしないよな。あ、麻苑てのは母さんの名前。

パパは、オレには『パパ』と呼ばせるくせに、母さんのことは『マソノ』って呼んでた。それで、ママも『パパ』とは呼ばずに『ダンナ様』って、呼んでたな。今じゃ、メイドの

明香さんが、そう呼んでるから……オレとしては、複雑な気持ちがあるんだよな。

それはともかく。しかたなくいっしょに入ったんだけど。

「いつ見ても、舞子のはだはスベスベだね」

ケノビができるくらいバスタブは大きいのに、ソファーと同じようにオレをひざの上に  
乗せて、うでやかたをナデナデサスサス。

「麻苑は、いつもはだがあれていたからなあ」

それは同感。オレが物心ついたときから、そうだった。打ち身みたいなアザとか、細長  
いひっかき傷とか、あちこちにあった。アレルギー体質だけど、かゆいとかはないって  
うのは、オレを安心させるためのウソだったかもしれないけど。昔は月に1回か2回だっ  
たけど、結こんしてからはしょっちゅうだったな。

「ひゃんんっ……?!」

マンマンの筋をくすぐられて、オレは飛び上が……れなかった。パパの左うでが、ガッ  
チリと胸をおさえつけてた。

「やめてよ。そういうところは、さわっちゃいけないんだぞ」

「パパが麻苑のこころをかわいがってたのは、舞子も知っているだろ」

夫婦ってのが、そういうことをするってのは、なんとなく知ってた。でも、親子3人で  
入って夫婦でイチャつくなんて、多分うちくらいだぞ。

「オレは母さんじゃないよ」

「麻苑は、天国へ行ってしまった。これからは、舞子がパパのおよめさんになっておくれ。  
麻苑も、それを望んでいたんだよ」

母さんはパパにベタボレだったから、パパをさびしがらせないように……じゃない！

義理でも養子でも親子だぞ。オレがおよめさんになれるわけ、ないだろ。

「やんっ……?!」

ピリピリッと、電気みたいなくすぐったさが、マンマンに走った。

「やめろよ。母さんがいなくなって悲しいのは分かるけど、オレだって悲しいんだぞ」

「だから、ふたりでなぐさめ合おう」

それは分かるけど、だからって夫婦のイチャイチャを父とむすめでってのは、絶対にちがうと思うぞ。

「もう、やめろよ。こんなことをするんなら、2度といっしょには入らないからなッ」

男言葉できつく言ったのが効いたのか、パパは指をマンマンからはなして、うでの力もゆるめてくれた。ので、立ち上がってバスタブから出て、身体をふかないまま自分の部屋へにげた。

あらためて身体をふいて、整理ダンスから新しい下着を出して。

どうしよう、どうしよう、どうしよう？

パパは、ロリコンでわけがないよな。クリスマス過ぎの母さんと結こんして、ラブラブだったんだから。30才そこそこで、いきなり大きなヒヨコの親になったものだから、愛情表現がこんがらかってるんだろう。それとも、母さんのおもかげをオレに重ねてるのかな。

でも、やっぱり、ちょっとは不安だ。

義理のお父さん（養親ていうんだよな）にエッチばいことをされました——なんて、まさか110番とか交番なんて、大げさだし。

——午後11時くらいまでねつけずに、モンモンと考えて。やっぱり、担任の岩<sup>いわひで</sup>秀先生に相談するしかないよな。

義理父の強カン未すい

先生のアドバイス（？）には納得できなかった。

「血はつながっていないのだから、そういう意味では、男女のスキンシップとして、それくらいはふつうだという考え方はできるね」

「でも……そんなの、考えたことないや。養子でも父親でしょ。やっぱり、変だと思いません。母さんが居なくなって、その代わりがオレだなんて……」

言ってるうちに、パパの言葉がムジュンしてるのに今ごろになって気づいた。

オレのことをヒヨコだなんて言っときながら、およめさんになってくれだなんて。

「これからも、お父さんに養ってもらわなければならないんだろ。すこしはがまんして愛想良くしておいた方が、良くはないかな」

「……………」

先生の言ってることは、なんかおかしい。でも、どこがおかしいのか、うまく言い返せない。

「すぐには納得できないかな。それじゃ、こうしよう」

家庭内のもめ事は『民事不介入』といって、警察は手を出せない。何かあったら、先生に連絡しなさい。電話番号は知っているね。

連絡ノートに書いてある。確かめよう。

——その日のうちに、電話で助けを求めることになっちまった。

パパの後から入浴して。宿題を片付けて。パジャマに着変えてから下へ降りて。歯みがきも済ませて。お仏壇の母さんに「お休みなさい」をして、もちろんパパにも「お休みなさい」を言って。午後9時にはベッドにもぐりこんだ。昨夜はねつけなくてすいみん不足だから、すぐにグッスリ。

……………

……………

……なんか、くすぐったい。それにはだ寒い。布団を引っ張り上げようとしたら、何かに手が当たった。

「……？」

目を開けたら。そこにパパの顔があった。

「……！」

パパが、オレのパジャマをはだけて、胸をなでていた。だけじゃなくて。

「起きてしまったか。静かにしていなさい」

ズボンをパンツごと引き下げられた。

「やめろよ！」

手をはらいのけようとしたけど、逆につかまれて。両手をまとめておさえつけられた。

パンツまでぬがされた。

パパがベッドへ上がってきた。夜にくつろぐときに着ているガウンだった。その前をは  
だけると……下には何も着ていなかった！？

「……………?!」

豆電球の暗がりの中でも、パパのチンチンが、いつもの何倍もの大きさになって先っぽ  
が上を向いてるのが見えた。これって、ボッキていうんだよな。自分でいじったりエッチ  
なことを考えたりすると、こうなる（らしい）。

「舞子。パパのおよめさんにしてあげるよ」

オレの足をつかんで——赤ちゃんのオムツを変えるときのような姿勢にさせようとした。

「麻苑よりも、よっぽどきれいなオマンコだね」

パパは、これまで見たことのないこわい顔をしている。何をするつもりなのかは分から  
ないけど……ものすごくエッチなことだと、直感した。

「やめろ……やめてよ！」

オレの声を無視して、オレの足の間に身体を割り入れてきて……くそ、なんだよ。マン  
マンにツバをはいて、そこを指でこねくる。

「ひゃうんっ……?!」

ビリビリッと電気みたいのが走って、変な声が出ちまった。

「痛いっ……！」

マンマンの中にまで指を入れられた。

あつ、そうだ！

男はキンタマをけられると、ものすごく痛がる。実際、けられたんじゃないけど鉄棒でずり落ちかけてキンタマをぶつけた男子がいたっけ。しばらく地面にうずくまって、それから、なぜかケンケンをしてたっけ。

でも、そんなことをしたら、パパにしかられる……なんて、ちらっと考えたけど。ものすごくエッチなことをしようとするパパが悪いんだぞ。

右足をうんと縮めて——パパのまたぐらをけるというか、おし返した。

「うぐふっ……」

ベッドの上で、パパがもんどり転がった。鉄棒のときと同じで、またを両手でおさえてうずくまって……オレは、ぬがされかけたパジャマを引きずって、部屋からにげ出した。

家にいたら、またパパにおそわれる。

オレは、リビングのすみに置かれてるお仏段のどこへ行った。まだ残ってた。お供えなんかな、小銭がセンコウ立ての横に置いてある。由来はパパも知らないみたいだけど、母さんの生まれた地方ではそうするらしい。

その小銭をもらって、家を飛び出した。

近くの公園まで行って。パパが追っかけて来ないのを確かめてから、電話ボックスに入った。10円玉を何枚か入れて、先生の自宅に電話をかけた。

「礼堂舞子です。パパが……すごくエッチなことをしようとするんで、家出しました」

家出じゃないけど、ふつうの外出でもない。

「落ち着け。何があったか、くわしく言いなさい」

「ええと……今日はパパとおふろが別で、ねてたら部屋へ入って来て、ねぼけてるうちにパジャマをぬがされて、マンマンをいじられて、チンチンが大きくなって……キンタマをけて、にげて……」

しもろどもろってやつ。

「落ち着け。とりあえず、家へ帰ってなさい。明日の朝にでも、先生が家庭訪問しよう」

「でも、帰ったら……パパをけとばしちゃったし……」

「だいじょうぶ。お父さんも頭を冷やしていることだろう。何も起きない。先生を信じなさい」

そんなもんかなとは疑ったけど。いくら6月でも、深夜にパジャマじゃうすら寒いし。けど、カギをかけられてたらどうしよう。

おそるおそる家へもどった。げん関にカギはかかってなかったし、パパの姿はリビングになかった。まさか、オレの部屋でもん絶したままなんて……ことも、なかった。

でも、またおそわれたらこわいので、毛布にくるまってドアにもたれかかって——いつの間にかねちゃってたな。

ずずずっと背中をおされて、目が覚めた。パパかなと、身構える前に。

「舞子ちゃん。先生だ。だいじょうぶだから、ここを開けなさい」

へ……？

外はうす暗い。夜明け前？ こんな早くから家庭訪問？

とにかく、開けてみたら。岩秀先生の他に……おまわりさんが立ってた。その後ろにも、知らない小父さん。

「私は市役所の保護司です。礼堂舞子さんですね。あなたを保護します。しばらくの間、養い親から引きはなして、保護シセツで暮らしてもらいます」

なんだか、110番より大げさなことになってるんじゃないか？

「あの……それで、パパは……タイホとか、されちゃうんですか？」

「とりあえずは署まで同行していただいて、事情をうかがって。後は舞子ちゃんの証言次第かな」

「ちょっと……ええと、スキンシップが行きちがっただけです。オレ、平気です」

「こういう場合は、とにかく保護するのが規則だから。問題がなければ、すぐに帰れるんだから。とにかく、いっしょに来なさい」

お役人は規則の一点張りだって、オトナのぼやきってやつを聞いたことがあるけど。ほ

んと、そんな感じだ。

「その方が、舞子ちゃんのためなんだよ」

岩秀先生までも、保護司さんに賛成している、。めんどうなことになるっちゃった。

「納得してくれたかな。すぐに支度をしなさい。生活に必要な物はすべてシセツにそろっているから、パジャマのままで来てもいいんだよ」

そんなわけにはいかない。

下着はおふろの後で変えているから、よそ行きの……シセツから通学するんだから、制服だな。

ばたばたと着変えて……るとちゅうで、こういうときは男の人には出て行ってもらったと思い出したけど、今さらだよな。

下に降りたら、だれも居なかった。

「ああ。お父さんは先に警察へ同行してもらっているよ」

これでオレまで居なくなったら、戸閉りが不用心だ。

「あの……いきなり、オレたちが居なくなったら、メイドの人が朝に来て困ると思います」

「取りこし苦勞の多い子だね。ちゃんと、市役所の方から手配をしてあげる」

連れ出されて。門を出て50メートルくらい歩いて、空き地に止まっている車に乗せられた。オレを真ん中にして、両側に保護司さんと担任の先生。運転してるのは、おまわりさん。これ、ふくめんパトカーでやつかな。だとすると、まだバスは走っていないから、先生はここまで来るのに、まさか歩きだったのかな。

しまった。ランドセルも教科書もノートも置いて来ちゃった。

それを言ったら。シセツに居る間は学校を休む決まりになっているから、問題はないそう。うだ。大有りだぞ。牛のシツポからさえ、転げ落ちちゃう。

車は小さなアパートに寄って、そこで先生を降ろした。保護司さんと2人並んでシートに座って、ますますきん張しちゃう。ちょびつと不安にもなってくる。けど、小さなコップにバケツの水を注ぎこまれたみたいな感じで、あれもこれも、きちんと考えられない。

車で1時間くらい走ってるうちに、夜が明けて。着いたところは、飛行場。ジェット旅客機の発着する飛行場じゃなくて、軽飛行機とかヘリコプターがちょこっとあるだけ。

「ここからはヘリコプターで行く。トイレは今のうちに済ませておきなさい」

「シセツって、市の中にあるんじゃないんですか？」

「レアケースの特別な事情をかかえている子の収容シセツだからね。あちこちから集めているんだよ」

特別な事情って……やっぱり、パパがオレにしようとしてたのは、行き過ぎたスキンシップとかじゃなくて、もっとひどいことだったのかな。

頭がこんぐらかったまま、トイレへ行って。それから、保護司さんとヘリコプターに乗った。運転するのは、もちろんおまわりさんじゃなくて、操縦士さん。なんか、パイロットて感じじゃない。ぴしっとした制服じゃなくて、暑苦しそうな革ジャンだもの。

——ヘリコプターから街を見下ろすのは、初めての体験。ジェット旅客機は乗ったことがあるけど。あれって、ぐんぐん街並みが小さくなって、すぐ雲の上に出ちまう。ヘリコプターからだとか、ジオラマを見下ろしてる感じだ。

ジオラマはすぐに終わって。後は緑と茶色のデコボコ、つまり山の上を飛び続けた。

ヘリコプターはエンジンの音がすごくて、まともに会話もできない。ので、ひたすら山と川と、たまに横切る道路ばかりをながめてた。

不安と退くつばかりの時間が過ぎて。山が真下にまでせり上がってきた。山と山の間に草原がある。馬が5頭くらい見える。牧場かな。

そのすみっこに、ヘリコプターが着陸した。牧場の人たちだろう、3人が近寄って来た。中年の小父さんと小母さんと、若いお兄さん。

「あの人たちが、これから舞子ちゃんを再教育してくれるんだよ。逆らうとチョウバツだからね」

「え……それって、どういう……？」

質問を言い終わる前に、オレはヘリコプターからつき落とされた。下が草地だから、す

りむきもしなかったけど。小父さんとお兄さんが、オレの手をつかんで引きずった。

グオオオン。エンジンの音が大きくなって。

バダダダダ。台風みたいな風をふき付けて、ヘリコプターが飛び上がった。

ふたりの男の人は、問答無用でオレを引きずる。

「ここって、保護シセツだと聞いてます。小父さんたちは、シセツの人なんですか？　なんだか、牧場ぽいですけど？」

「ごちゃごちゃ言うな。来れば分かる」

パパに無理矢理に『およめさん』にされるより百倍も悪いことが待っているような気がする。でも、オトナふたりの力に逆らおうとするほど、オレはうろたえちゃいけない。引きずられるんじゃなく、おとなしくついて行った。

やっぱり牧場だった。何百メートル四方もありそんな草地は木のサクで囲まれていて、山に面した一画に平屋がならんでいる。そのうちの2つは、大きな門が開け放たれていて、中に何十頭もの馬が見えた。

その馬屋のひとつをおくまで通りぬけて——そこで、オレは本当にビックリギョーテンしちまった。

## ポニー少女と使役ロバ

裏庭って感じのそこに、はだかのお姉さんが立っていた。ナワでしばられて、小さなリアカーみたいなのにつながれている。

「その荷車に乗れ」

背中をおされたけれど。乗れるわけ、ないじゃないか。オレが乗ったら、お姉さんが引くんだろ。申し訳ないじゃ済まないような気がした。

「めんどうだな。コンポウしちゃうか」

お兄さんが、オレのうでを背中へねじ上げた。

「痛い！ なにするんだよ？！」

「こうするんだ」

お姉さんがしばられているのと同じうす茶色のナワで手首をしばられた。逆らおうにも、女の子がオトナの男にわん力で敵うはずがない。手をしばられただけじゃなく、地面におしたおされて、身体を逆エビに折り曲げられて、手首をしばったナワで足首までしばられた。

「よいせっと」

「痛い痛い痛い……やめろ！」

手足をつないでるナワを持って、オレを宙づりにしやがった。身体が引きしばった弓のように曲げられて、背中がミシミシ痛い。

どさっと、荷車の中へ放りこまれた。

「やめろ！ バカヤロウ！ ほどけよ！ オレをどうしようってんだ？！」

小父さんが細長い棒を、オレの顔の前へつき出した。先っぽがふたまたに分かれて、とがっている。小父さんが、オレの後ろへ動いた。

チクッと、しりに痛みが走ったと感じたしゅん間。

「きゃあああっ……？！」

ビリビリッと、つき差さりながらふるえるようなショックが、しり全体に走ったというか、暴発した。

「いなくなつて、電激を食らわすぞ。ケツで効かないなら、パンツの中に打ちこんでやるぞ」

くそ。なんてことしやがる。感電したら死ぬんだぞ。

「……………」

「なあ、親父……」

「オーナーだ。ポニーの前では言葉使いに気をつけろ」

オーナーか。こんなひどいことをするやつを小父さんなんて、心の中で考えるだけでもヘドが出る。オレも、そう呼んでやろう。

親父と呼びかけた若いやつが、身をかがめてオレの顔をのぞきこんだ。

「いっそ、ハミをかませてやろうか？」

ハミ……？

「ミャナカンツオーネ。ハミを見せてやれ」

はだかでしばられてるお姉さんが、オレをふり返った。

「……！？」

お姉さんは横棒を口にくわえてた。棒のはしに金具とかバンドが付いてて、それが顔をしばってるから、くわえさせられてるんだ。まるで、サルグツワだ。

「これなら、いなくてないから、電激を食らわずに済むぞ？」

「……ハミなんて、いやだ。さわがなけりゃ、いいんだろ」

「そうか」

若いやつが下がると、またオーナーが棒をオレにつきつけた。先っぽがすうっと下がって、オレの胸元に近づいた。

もしも、胸につき差されたりしたら……いや、きっとオレを試してるんだ。さけんだりするもんか。

「ひっ……」

棒の先が、服の上から胸におしつけられた。ほんのちょっただけチクツとしたけど、電激は食わなかった。

「よかろう。ハミは無しだ。すぐに外すから、手間だわい」

オーナーは、満足そうにうなずいて。電激棒の先をお姉さんのしりに当てた。

軽くふれただけなのに、お姉さんはビクンと大きく背中をふるわせた。

「ゴーアヘッ」

かけ声で、お姉さんが上体をたおして足をふみ出した。でも、前へ進めない。

あれ……？

お姉さんは荷車につながれてるように見えたけど、なんだかおかしい。

荷車からつき出てる長い鉄の棒は、とちゅうでヘビがカマクビを持ち上げるみたいな形（こんな感じ——）をしていて、上の棒がまたすれすれをつきぬけている。お姉さんをしばっているナワは棒に結ばれているけれど、ピンと張った感じはない。なのに、お姉さんは足をふん張って、荷車を引こうとしている。

「ハイヨウ」

マスターがお姉さんのしりに電激棒を、今度はつき差した。

「きひいっ……」

悲鳴かな。いなくなんて言うもんだから、そんなふう聞こえる。

ぐううっと、お姉さんがさらに前のめりになって。ごとんと、荷車が動いた。動き始めると、お姉さんが身体を起こしても、そのまま前へ進んで行く。これは、静マサツと動マサツの関係だ。でも、ゆるんでるナワで、どうやって荷車を引けるんだろう。

不思議に思ってるうちにも、荷車はゆっくりと進んで行く。

「あう……くうう……あんっ……」

お姉さんは1歩ごとにうめいている。でも、苦しそうには聞こえない。おふろに入って、熱いけど気持ち良いときに出る留息に似てるかな。

「ぐうう……」

お姉さんが力みだした。ここまでの道はほそうされてたけど、草地に差ししかかったんだ。

これまではゆっくりと進んでたけど、じりじりじわじわって感じになった。

「ドーオ、ドウドウ」

オーナーが、荷車とお姉さんをつないでいる鉄の棒を、バンバンとたたいた。お姉さんが止まった。

オレは、荷車の上でナワをほどかれた。痛む背骨をかばいながら、自分の足で荷車から降りた。オーナーよりちょっと若い感じの女の人が、オレの二のうでをつかんで——にげ

られないようにしたんだろうな。

オーナーが、お姉さんと荷車の連結（？）を解きにかかった。こしと鉄の棒をつないでいるナワをほどいて、鉄の棒をおし下げ……ええええっ？！

お姉さんのまたの間から、太い棒がずるずると出てきた。その棒は、引き棒に植わっている。

分かった。この垂直の棒をおして、荷車を引っ張っていたんだ。でも、腹に当てておしていたんじゃないよな。最初に見たとき、こんな棒はなかったもの。

あ、もしかして。マンマンには、チンチンを入れる穴があるそうだけど、そこへ入れてたんかな。

「ひゃあっ……？！」

ぽんっとしりをたたかれて、スカートめくりをされた女の子みたいな悲鳴をあげちゃった。

「心配するな。おまえにはチツ引きはさせない。ケツ引きをしこんでやるけどな」

若いやつが、しつこくしりをなでる。身をよじってにげようとしたら、女の人にうでをねじ上げられた。

「じっとしてなさい。身体をなでられていやがるようでは、立派なポニーになれないよ」

ポニー。たしか、子馬のことだったよな。お姉さんに「ハイヨー」とか「ドウドウ」とか、あれって馬へのかけ声だろ。「いなくて」とか言ってたし。オレもお姉さんも馬としてあつかわれてる？

「みゃああっ……」

くぐもった悲鳴がきこえたので、そっちへふり返った……ら、お姉さんと荷車よりもキテレツな光景が目飛びこんできた。

女の子が2人で縦1列になって、人間を乗せた車を引いている。お姉さんとちがって、はだかじゃない……よな？

むき出しの胸の下からこしまで、黒光りする帯（？）を巻いてて、手はしばられていな

い。ひじをわきに付けて、水平に上げている。これで前後に動かしたら汽車ポッポだ。こしから下も（マンマンまで）むき出しだけど、ひざまである黒いブーツをはいて、ももが水平になるまで足をけり上げて歩いている。

引き棒は——またの間を通ったりはしていなかった。こしの横を通っている。金具で腹帯に連結されてるらしい。

そんな人力車が2台、競い合うように走っている——てほどのスピードじゃないけど、お姉さんが荷車を引いてたときよりは速いかな。

「ラアアイト」

車に座ってる男の人が、細長い棒で後ろの女の子のしりを打った。

ザッザッザッと足並みをそろえて、2人の女の子が右へ大きく回り始めた。オレの方へ向かって来て。

「レエエフト」

オレの目の前で横向きになって通り過ぎた。その何秒かのうちに、いろんなことが見えた。女の子は2人とも、オレより2つか3つは年上（お姉さんは5つ以上だろう）に見えた。お姉さんと同じようなハミをかまされて、そこからのびた細いナワが、人力車に座る男に持たれている。

顔に付けているのはハミだけじゃない。ハチマキみたいなのを額に巻いて、正面には大きな鳥の羽根みたいのがかざられている。

うでを『小さく前へ習え』みたいになっているのは、手首をタコ糸でしばられて、乳首につながれているからだだった。手首から下にも垂れているタコ糸には小さなスズがつるされて、それをひざでけり上げている。

シャン、シャン、シャン、シャン。

ももが水平まで上がるから、歩くよりもおそいくらいなのに、かけ足をしてるみたいに見える。

「あれが、ポニーガールだ。おまえもああなるように調教してやる。楽しみにしている」

言われて、オレは我に返った。

「どういうことなんだよ?! オレはパパから引きはなされて保護されるんじゃないかったのか?」

オーナーが電激棒を胸につきつけた。

「静かにしていると約束したな。破るのなら、ハミくらいでは済まんぞ」

くそお……何がどうなってるのか分かるまで、おとなしくしてるしかない。分かっても、どうしようもないかもしれないけど。

「もちろん、ドンキーガール——ロバ少女としてもたっぷり使役してやる。おお、忘れておった」

はだかでしばられたまま、何も言わずにぼつんと立っているお姉さんを、オーナーがふり返った。

「ドンキーは終わりだ。そのままキュウシャへ行って、次の調教を待っている」

お姉さんは、返事もうなずきもせず、くると向きを変えて——さっきの女の子と同じように、足を高くけり上げながら、草地のすみに並んでいる建物に向かって歩いて行った。

オーナーがオレに向き直った。

「おまえには、調教前の検査と処置がある」

検査と処置。オレも、これまでの『まともに服を着ていない』5人と同じようにあつかわれるんだとすると……ろくでもない予感しかない。

## 身体検査と性器ほう合

3人に取り囲まれて、お姉さんが向かったのとはちがう小屋へ連れて行かれた。保健室と倉庫をひとまとめにしたような小屋。体重計とか身長計とかは保健室扱いけど、何に使うのか分からない大道具やら……かべにはムチとかクサリとかナワがかけてある。

部屋には、3人の男の人が待ちかまえていた。お兄さんぽいのおじいさんぽいのと、デブ中年と。オレを連行して来た3人から小母さんがぬけて、全部で5人。

「まずは身体検査からだね。着ているものを全部ぬいで、すっぱだかになれ」

オーナーに言われて。はい、そうですかなんて、できるかよ。

「オレをどうするつもりなんだよ。帰してくれよ。変なことをしたら、警察に言うぞ」

うわははは——わざとっぽく、じじいが笑った。

「なかなか歯ごたえのありそうなポニーじゃの」

「服をぬげと言ったのだが。従わないなら、おさえつけて切りさいてやってもいいんだぞ？」

言って聞かせる——みたいな口調が、かえって不気味だ。くそ、ぬげばいいんだろ。男子にパンツを見られても平気なオレだぞ。身体検査でも何でもしやがれ。

オレはブレザーをぬいでスカートをぬいでブラウスもはだ着も、いさぎよくぬいだ。

「手が止まったぞ。わしはすっぱだかになれと言ったぞ？」

ちっ。パンツもぬげってのかよ。プール授業の着変えだと思えば、どうってことないぜ。

パンツに手をかけて……くそ、なんで指がふるえるんだよ。手を動かせないんだよ。

「手が止まっているぞ。みなさん、手伝ってやってください」

オーナーとその息子を除く3人が、オレにつめ寄ってくる。

羽交い閉めにされた。デブ中年が、パンツに手をかけて……

「おっと。先にクツをぬがさないと、引っかかる」

足元にしゃがんで、オレの足を持ち上げようとした。

「やめろ！」

反射的に、オレはそいつのあごにケリを入れようとしたんだけど——後ろへ引っ張られて、空を切った。

「どうやら、身体に教えてやらないとダメみたいだな」

オーナーが電激棒をオレにつきつけた。

「わしにやらせてくれ」

中年デブが、オーナーから電激棒を受け取った。

「なんだ、50じゃないか」

チキキと、ニギリを回した。

「しっかり、おさえていてくれよ」

オレを羽交い閉めにしてる若いやつに声をかけてから、電激棒をオレに近付ける。

「どこに食らわせようかな」

電激棒がずっと上がって、ふたまたの針の1本が乳首にふれた。

「……………！」

思わず目をつむって歯を食いしばったけど、軽くチクツときただけ（でも、飛び上がりかけた）で、通電されなかった。

はだをなぞりながら、電激棒が下がる。水平だった2本の針が、上下になった。

「くうう……」

パンツの上から、割れ目をなぞられた。まさか、こんなところにつき差したりは……

「ひゃんんっ……？」

くすぐったいようなゾワゾワするような感じが、マンマンをつきぬけた。割れ目の上はしに、小さなイボみたいのがかくれてるけど、そこをつつかれたんだ。黄世音ちゃんが、そこはマンマンの穴よりも気持ち良くなれるポイントだって言ってたけど、自分でコソツとさわると、オシッコをチビりそうになるけど——今のは、気色悪いだけだった。

「ここか……」

針がプツツとつき差さった。

「痛いっ……ぎゃわゝあゝあゝあゝっ！！」

**ビビビビビビ！！**

マンマン全体が暴発したようなショック。

「ぐううう……」

ひざがぐだけた。どんっとつき飛ばされて、オレはゆかにつんのめった。

痛いよおお。両手でマンマンをおさえて……生温かい？

「おいおいおい。幼稚園児じゃあるまいに、おもしろいかよ」

5人ともが、ケタケタ笑ってやがる。はずかしい。でも、あんなすさまじいショックを受けたら、しょうがないじゃないか。

「ぬれたままじゃ気持ち悪いだろうが。とっととぬいじまえ」

もう、逆らう気力はなかった。自分で立ちあがって、自分でぬいだ。クツまでぬれてたので、クツ下とまとめてぬいだ。本当に、これで、一条まとわぬってやつだ。

「これでふいておけ」

目の前につきつけられた『これ』は、さっきまではいたスカート。後で着るときにイヤだなと思ったけど。さっきは「切りさく」とか言ってたな。外で見た女の子たち（とお姉さん）は、みんなはだかに近い格好をしていた。オレも同じにされるのかな。

2度と絶対に金輪際、電激はイヤだから。ごわごわした生地で、オレはマンマンをぬぐった。こしも足もぬれてたので、全部ぬぐった。

「よし、こっちへ来い」

体重計に乗せられて、身長計に立たされて。148cm、39Kg。学校の身体検査のときより、1cmと1Kg成長してた。

じじいにメジャーを巻きつけられて、スリーサイズも測られた。73／58／81——だったけど。

「ふむ、チブサはないに等しいな」

有るよ。つうても、プチトマトをおしつぶしたくらいだけど。

じじいのやつ、指をすぼめて胸をもむんじゃなくてつまみやがった。

ふくらみかけのチブサはびん感なんだぞ。痛いんだ。でも、もう絶対にいらないたりはしない。がまんする。

「ふふん」

メジャーをゆるく巻いて、77cmだと言った。

「しかし、こうすれば……」

ぎゅうっとメジャーを引きしぼりやがる。

「74センチだな」

「たしか、ジャパユキンがAAAカップだったな。こいつはそれ未満。ゼロカップというわけだ」

中年デブがあざ笑いやがった。

でも、くつじょくはこんなものじゃ済まなかった。

ひじかけのあるビニール張りのベッドにねかされて——ひじかけじゃなかった。足を乗せる台だった。パカッと大また開きをさせられた。胸とこしと足にバンドを巻かれて、身動きできなくされた。

じじいが、オレのまたぐらをのぞきこんで……

「やだっ……」

マンマンをピンセットの親玉みたいのでつつかれて、声が出ちまった。

「そうか。チツは測定する必要がなかったな。まあ、エイン長は2.5センチだ」

じじいは銀色のトレーにピンセットの親玉をカシャンと置いて、左手の指に油みたいなのを垂らした。

「力を入れると、かえって痛いぞ」

その指で、オレのこう門のまわりをもみほぐし始めた。

ううう……くすぐったいし、気色悪い。これって、ひょっとしてエッチなことかなと思ったけど。エッチてのは、マンマンとチンチンだよな。

「ひゃああっ……?!」

つぷんと、指先が穴に入ってきた。油みたいのがぬってあるので、痛くはなかった。でも、すごく変な感じだ。

指はすぐにぬいてくれた。

じじいが、きみような形をした棒を手にとった。ピンク色のクシ団子みたいだけど、先

へ行くほど団子が小さくなっている。

「あうっ……?!」

もしかしたら、まさかだよなどと、疑ってた通りのことをされた。クシ団子をこう門につき差したんだ。ぐぼんと、最初の団子が入ってきて。次のやつも入ってきた。無理矢理にこう門を広げられて、ぴききと痛みが走った。

「痛い……やめてください」

3つ目をおしこまれそうになって、オレは降参した。

「やっと、しおらしい言葉使いになったな」

オーナーがゆかいそうに言った。

「すんなり入るのは25ミリまでですな。まだシワがのび切っておらんから、30は問題なし。35でも切れたりはせんでしょう。しかし、それ以上は難しいですな」

「じゃあ、ぼくは3番手くらいでがまんするか」

じじいの言葉に若いやつがそう返したけれど、意味が分からなかった。

「それで、ハウゴウしてもクリはろ出できますか？」

「いけますな。ハウヒをおし下げる形になりそうですが」

「むしろ好都合だな」

オーナーとじじいの会話も意味不明だった。

オーナーがビデオカメラを持って来て、オレのまたぐらにレンズを向けた。

「おい、やめろ」

しおらしい言葉使いなんか、するもんか。どうせ、聞いちゃくれないんだから。

「たしかにバージンでしたよと、おまえの父親にも報告しなければならんのでな」

パパに……？

パパのエッチな行ないからオレを保護するなんて、ウソッパチだと感づいてはいたけど……それだけじゃなくて、こいつらとグルだったんだ。でも、パパとこいつら、オレをどうしようってんだろう？

あの女の子みたいなことをさせるんかな。あれって、チンチンもマンマンも関係なさそうだけど、すごくエッチなことのようにも思えるぞ。

それよりも……こいつらとグルなんだったら、パパもじきにここへ来るんだろうか。こいつらに変な事をされるより、もっとイヤだ。

——とりあえずは、それ以上に変な事はされなかった。

はだかのままで馬小屋へ連れて行かれて、にげられないようにナワで手足をしばられて、空いている小部屋へ放りこまれたのが『変な事』じゃなければ——だけどな。

一体全体、何が起きてるんだよ？

ワラをぶちまけたゆかの上に転がされて、ようやく考える時間ができた。

パパが養子のオレにエッチなことをするから引きはなして保護するという口実で、ここへ連れて来られて。でも、それは、どうやら、保護司と名乗ったやつとニセモノかもしれないおまわりさん（もしかすると担任の岩秀先生も？）とが、パパとグルになって仕組んだワナだった。

そんで、ここでオレをどうするつもりなんだろう。ロバみたいに荷車を引かされてたお姉さん。人力車（じゃなくて馬車？）を引かされてた女の子たち。ああいうふうなことをさせられるんだろうけれど。何のためなんだよ？

オトナのゴッコ遊びなんてものじゃないだろう。

くそっ。見当がつかない。

次に何かされるまで、こうやって転がされて待ってるしかないんかな。でも、その何かは電激棒や身体検査（？）よりも、ずっと悪いことひどいことじゃないのかな。

バラバラ……

ヘリコプターの音だ。オレを連れもどしに……来たんじゃなかった。音から判断して、いったんは着陸したけど、すぐに飛び立った。そして遠ざかって行った。

1時間（2時間？）で何回も、ヘリコプターのり着陸があった。ヒュウウウンなんて

音のやつもあったから、全部別のヘリコプターだったかもしれない。

6月の長い昼も、やっとかげがのびてきたころ、オレは馬小屋から（文字通りに）かつぎ出された。これまでに見た5人とはちがう男だった。

かたにかついで連れこまれた先は、さっきと同じ小屋だった。10人以上の老若男女がひしめてた。と言っても、よぼよぼのジジババは居なかった。

はだかでしばられてるお姉さんと、チブサとマンマンをむき出しで腹帯だけ巻いて、その腹帯に手首を金具でつながれてる4人の女の子は居たけどな。はだかの5人はハミっていう横棒をくわえさせられてた。

オレは手足のナワをほどかれて——またすぐに、さっきの足乗せ台付きのベッドに、さっき以上のガンジガラメにしばりつけられた。

老若男女が、わらわらとオレを取り囲んだ。女ってのは、PTAのお母さんみたいな人で、はだかの5人は、かべぎわから——何かきみょうな表情で見守ってる。オレに同情してるような分囲気だ。

おっと、老若男女の中には、アメリカ人みたいなおっさんもひとり混じってる。

「これから行なう処置について説明いたします」

オーナーが見物人に語りかけた。

オレに何を<sup>する</sup>かの説明だから、全身を耳にした。

「この牧場では、飼主に素直でないじゃじゃ馬を忠実なメスドレイに調教していることは、みな様ご存知の通りです。当然に、メスマンコだけでなくケツマンコもクチマンコも調教の対象です」

何とかマンコてのは良く分からないけど、飼主てのがパパのことだとしたら、つまりパパに何をされても逆らわないように調教するってことだな。たとえば、エッチなことでも。

「しかし、このポニーは処女なのです」

見物人がざわめいた。

「当然ながら、飼主様は、ご自分のマラで破るおつもりです。たとえディルドといえど送

入は不可と、うけたまわっております」

「それでは、満足な調教ができないんじゃないかね？」

「いえいえ。クリさえあれば、メスの調教は何とでもなります。なお、残りの2穴も処女ですが、こちらは会員のみな様に提供していただいております」

「ゴウギだな」

「オチンポのあるトノガタがうらやましいですわ」

さっぱり分からないけど、とてもエッチなことを言ってるらしい。

「しかし、調教の過程で事故が生じないとは限りません。会員資格の取り消しと供宅金のぼっ収で済む問題ではありません」

そこで——オーナーが、オレの割れ目を両側から指でつまんで、きゅっと閉じ合わせた。

「調教期間中はインシンをハウゴウして、チツとマクを保護しておきます」

オーナーがどいて、さっきも居たじじいが、またぐらの向こうに立った。白いかつぼう着みたいのをまとっている。

「ひゃ……？」

マンマンをくすぐられて、冷たくて。これって、アルコール消毒？

じじいが動いて、オレの目の前に銀色の針をかざした。小指の半分くらいの長さで、三日月みたいに軽く曲がっている。タコ糸みたいな太い糸が通してあった。

「これを、どこにどうするか、分るかな？」

まさか……さっきのオーナーの長広舌。ハウゴウてのは、ぬい合わせるって意味だよな。マンマンを指でつまんだ意味も、何となく分かってきた。はっきりとは分かりたくない。

「その引きつった表情が、有弁な返事だな」

「なお、マスイは一切使いません。ポニーのいななきを、存分にお楽しみください」

オーナーがおそろしいことを言った。

「しかし、純すいな痛みだけでは調教にならないのでは？」

「このポニーは、我がアカトメシンボ牧場始まって以来のじゃじゃ馬でしてね。まずは反

向心をとっ底的にへし折っておきます」

くそ、勝手なことを言ってやがる。マンマンへの電激だけで、じゅうぶんにへし折られてる。痛いのは、もういやだ。

「それに、飛び切りのアメ玉は……まあ、仕上がりをごろうじろ、ですね」

きゅっと割れ目をつままれて、肉を内側へ寄せられた。なんか、ちょこっと気持ち良かったり……

「痛いっ……うゝあゝあゝっ！」

特大（針でツメの中をつき差したときの百倍くらい？）のチクツがあって、それがツグツグと肉の中に食いこんできた。

「ひいひいひい……」

細い痛みが、さらに走りぬけた。

顔をうつむけると、血で赤く染まったタコ糸がななめ上に引っ張られてるのが見えた。

オーナーが、またビデオカメラで手術（？）の様子を接写してるのも見えたけど、やめろ言っただってムダなのは学んでるから、あきらめた。これも、パパに見せるつもりなんか  
な。

パパは母さんが愛した人だったから、何やかやあっても、オレも（なついたりはしなかったけどさ）きらいじゃなかったけど——こんなことをされちゃ、にくしみの感情しか残  
ってない。

じじいが、またマンマンに何かコチャコチャしたけど、今度は痛くなかった。バンドに  
逆らって、さらに顔を起こすと、タコ糸が結ばれて、その部分がぴったり閉じているのが  
見えた。

針が、その1センチくらい上をつき差そうとする。見たくない。オレはのけぞって、両  
手をグウにぎりして歯を食いしばった。

でも、そんなんじゃ悲鳴をおさえられなかった。

「ぎゃあああっ……痛い痛い、痛いよお！」

ブヅッ、ツグツグ、ツウウッ。

それが3回4回とくり返されて、そのたびにオレは泣きわめいた。くやしいことに、なみだまで流したんだ。

最後に、じじいは黄色い粉末をふりかけて。ガーゼを当てて包帯を巻いてくれた。まるきりのフンドシみたいで……これ、オシッコはどうするんだろ？

「おっと、忘れるところでした」

オーナーが、ぺちんと額をたたいた。

「性器ほう合など、当牧場としても初めてで、しかも急きょみな様をお向かえして、アタフタですわ」

えええっ？

じゃあ、オレは実験台にされたのかよ？

「新馬の名前を、おひろめしていませんでしたな。新馬を向かえる都度に、気の利いた馬名に苦しみますが、こいつは実に楽でした。トジマンコです」

ワハハハと、下品な笑いがわき起こった。笑ってないのは、はだかの5人だけだった。

「その子は当才馬と聞いているが、本当かね？」

また、オレには意味不明の言葉が出てきた。

「事実です。と言っても、馬の数え方ではありませんから、この9月で2才馬になります」

「それにしても……」

質問した中年男が、オレを——まるで、品定め目つきだ。

「3才馬からというのは目安であって、厳格な方針ではありませんから。おい、ジャパユキン。ここへカム」

オレと同じくらいの年ごろの子が、オーナーの横に立った。

「こいつは6才馬ということになっていますが、とてもそうは見えないでしょう。実は初潮が来ておりません。さすがに発毛——は、牧場の方針で処理しておりますが」

その子は、オレとどっこいどっこいに見えた。浅黒くて、顔つきも日本人ぽくないけど。

「この子には4つ下の妹が居ますが、パスポートを発行してもらえなかったと——まあ、うわさですがね」

ほんとは4つ下の方ってにおわせてるんだな。2才馬ってことか。たん生日がきたら、オレは2才馬てのになるらしいから——ジャパユキンの方がちょっとだけ早生まれの、同級生じゃないかよ。

「ついでだ。残りの4頭もしょうかいしてくれませんか」

「月報に乗せてありますが？」

「いやいや。現物を前にして聞くのは、本人の反応が見えて面白いから」

「なるほど」

というわけで、ひとりずつ部屋の中央へ立たされて、短いしょうかいがあった。

オレを乗せた荷車を引いていたお姉さんは、ミャナカンツォーネ。牧場の受け入れ上限に近い8才馬。3才馬のときからくり返し入キュウして、今年が4回目。2回目からは本人の希望だっしょうかいされたけど……きっとウソだと思う。

その次にお姉さんばい人が、シカップボイン。

「いちおうはごてい主の手とマラで調教済みですが、ポニーやドンキーとしても飼慣らしたいとのご要望です」

もうひとりの日本人がメコチョーキョ。4才馬。

「初潮を向かえてからロストバージンしたという、けしからん経歴があります」

初潮は知識として知ってるし、ロストバージンてのは初めての本格的（の意味は、良く分らないけど）なエッチのことらしいけど、2つの言葉がつかないや。

最後にしょうかいされたのが、西洋の女の子。見た目そのままにホワイティーナだとさ。

5才くらいは上かと思ってたら、4才馬だった。2個しかちがわない。

「いやあ、かく世の感がありますなあ」

老若男女のうちの老男が、しみじみぼく言う。

「戦後40年。まさか、戦勝国の少女を子馬にする日が来ようとはねえ」

「それを言えば、ジャパユキンもですわよ」

若女が言いそえた。

「戦前は、逆にカラユキさんでしたもの」

戦後とか戦前とか、オレはおろか母さんだって生まれてない時代だよ。

それにしても——反応を見たいとか言ってたけど、5人ともボケッとつつ立ってるだけだった。初潮とか発毛とか、エッチばいことをバクロされても平然としてる。

あ、そうか。ここでは、女の子を馬に見立てて、馬としてあつかってるらしい。馬なら、馬耳東風。そこまで『調教』されてるってことかな。

オレも、こんなふうにな調教……されて、たまるもんか。でも、電激棒はイヤだ。ハウゴウも絶つつつ対にイヤだ。

各馬(?)のしょうかいが終わってから。オレはようやくベッドから降ろされたけど、マンマンが痛くて、まともに立つこともできなかった。また、かたにかつがれて馬小屋へもどされた。

かつがれてるとき、しりをなでられたけど、だまっていがまんしてた。

5人も、馬小屋のそれぞれの仕切りの中へ入ったんだけど、そのどれにも先客の(本物の)子馬が居たんだ。同居っていうのか、世話をしてるのかな。

5人には、さっきの小屋からついて来たやつらが寄ってたかって、ナワをほどいてハミも外して。腹帯を着けてる子は、それも。

つまり、全員がまっばだかにされた。それから、ランドセルの背負いベルトだけみたいなのを着けられて、背中の中長いヒモを仕切りのおくにつながれた。つまり、仕切られた区画から出られなくされたんだ。

オレだけは、ずっと厳しくあつかわれた。わきに下に通したナワを背中でつり上げられて、立ちっぱなしにされた。しかも、両足には穴の明いた木の板をはめられて、閉じれなくされた。

「決してマンコをさわんなよ。言うことが聞けんようなら、手もしばるぞ」

傷の保護らしいと分かったけれど、感謝する気にはなれないぜ。

「エサだ。その格好でも食えるだろ」

区画のおくは木のかべだけど、残る3方はこしの高さのサクになってる。通路側のサクは開閉する。

そのサクの上の空間に、底の浅い箱とバケツが並んでつり下げられた。箱の中にはパンとかソーセージとかが、ごちゃ混ぜに入れられてる。バケツには水。

両手が使えるから、食おうと思えば食えるけど、とても食欲が出るような……くそ、けっこう良いにおいがする。グキュルルなんて、腹の虫が勝手に鳴きやがる。昼飯はおろか、朝飯も食ってないもんな。

それに。反向的と思われると、また痛いこととかされるかもしれない——というのが、意地が食い意地に負けた言い訳。オレが手をのばしてパンをつまもうとしたら。

「家ちくが手を使うか。犬食いをしろ」

あたりを見回すと、みんな手を使わず、箱に顔をつっこんでた。

だれが、そんなことを……しなきゃ、痛い目を見せられるんだろうな。郷に入っては郷に従え。先ばいたちを見習うしかないや。

箱に顔を近づけて、パンもソーセージもニンジンも、いっしょくたにかぶりついた。食えなくはないレベルの味だった。

「いい食いつぷりだぞ。明日からでも調教できそうだと、オーナーに伝えておこう」

わざわざサクを開けて入って来て。しりをなでやがった。そんなのは平気（ということにしてく）だけど。

「ひゃっ……やだ」

乳首をつままれて、裏返った声が出ちまった。自分でさわるのとは、まるでちがう。ビビッと、電気みたいのが走った。電激棒とはちがって、痛くなくてくすぐったかった。ちょっぴり気持ち良かったなんてことは、絶対にないぞ。

オレたちがエサを食ってるあいだに、老若男女はぽつぽつと出て行った。

——後に残されたのは、はだかの女の子が6人と、本物の子馬が5頭。子馬が足ぶみをしたり鼻を鳴らしたり。オレ以外の女の子は、ワラの上に座ったり、立ったまま子馬にもたれかかったり。だれも何も言わずに何十分かが過ぎてった。

おれは、生理的現象でやつになやまされ始めた。

「あの……話してもかまわないですか？」

オレの右側の区画に居る、ミャナカンツォーネさんに声をかけてみた。年上だから敬語。

「なあに？」

「あの……オレ、ええと、トイレをどうしたらいいか、分からないんです」

はだかで変な格好にされてても、オレだって女の子だ。はじらいってやつが、少しはある。

でも、ミャナカンツォーネ（言いづらい。ミャナでいいや）さんにはなかったみたいだ。

「あら。言われるともよおして来ちゃった。百聞は一見にしかずよね」

ミャナさんは区画のおくへ行って、大きなバケツをまたいでしゃがんだ。

うえ……正面を向いてオシッコをしてる。そんで、後始末もしないでオレの横までもどって来た。

「落ちてるワラでふいてはダメよ。かえってバイキンが付くから」

オレが納得いかない顔をしてるのを見て、言い足してくれた。

「わたしたちはポニーなの。ドンキー、ロバとしてあつかわれることもあるけどね」

「人間あつかいしてくれるときも、あるじゃない」

向かい側の区画から反論したのは、メコチョーキョさん。この人もシカップポインさんほどじゃないけど、オトナばい体型をしてる。てか、ジャパユキンちゃんでも、オッパイと言えるくらいのふくらみはあるもんな。

「そうか。あなたはつるされてるから、バケツは使えなかったんだ。本物のポニーと同じにしろ。つまり、そこで立ったままだね」

メコさんには取り合わず、ミャナさんが続けた。

「ハーネス、じゃなくて包帯か。それは、ずらさない方がいいよ。勝手なことをしたら、チョウバツ食らうからね」

これは、右ななめ向かいのシカップさん。

みんな、声が優しい。新入りのオレのことを気使って、ここのルールを教えてくれてるんだ。でも、とんでもないルールばかりだ。

「ミヤナカンツオーネが、こっち向いてしゃがんだでしょ。ああしないと、スタッフさんたちにしかられるからね」

「スタッフって？」

「あ、そうか。教えちゃっていいかな？」

シカップさんがミヤナさんにたずねて。

「別にかまわないでしょ。オーナーがおっしゃってたように、トジマンコは異例づくめで、順序がテレコになってるだけだもの」

というわけで、この牧場の人たちのことをくわしく教わった。

オーナーというのは、牧場の持主。『さん』とか『様』の敬しょうは付けなくて良い。ていうか、『さん』付けするのは、オレたち（だけじゃなく、本物の馬も）の世話をする人だけを『スタッフさん』と呼ぶ。この牧場に住みこんでる。

オーナーのおくさん（オレを出向かえた3人の中の小母さん）のことは『マダム』と呼ばなければならない。その息子が『ジュニア』。

最後にごちゃごちゃ集まった老若男女のうちで、ひとりだけのアメリカ人は『コーチ』。女の子を馬<sup>ポニー</sup>少女に調教するプロフェッショナルだそう。やっぱり住みこんでるけど、3月から9月まで、ポニー<sup>ポニー</sup>ガール牧場がオープンしてる間だけで、半年は国へ帰っている。すっぱだかの女の子を冬に外へ放り出したら、こごえ死んじゃうよな。

オレの手術をしたじじいが『ドクター』。本職はじゅう医だそう。道理で、人間の医者よりも、やることがあらっぽいや。

その他は男が『マスター』で女は『レディ』。マスターとレディは、会員だそう。年会

費が100万円で、オレたちを調教するためにとまりこむと（2日か3日、長ければ1週間くらいだそうだが）、別に何十万円かをはらう。調教するのは、つまり、オレたちに荷車引きとか人力車引きをさせて、ムチ打ったり電激を食らわせることだ。

シカップさんが会費とかにもくわしいのは、かの女を入キュウさせたやつ（ダーリンなんて呼んでたぞ）が、まさにその会員だから。シカップさんだけじゃなく、みんなそうらしい。てことは、パパも会員なんかな。それだと、ツジツマが合うような気がする。

長々と説明を聞いてるうちに、差しせまっていた欲求をやつがうすれてくれた。

「ええと……もすこし、がまんしときます」

立小便なんて、いやだもんな。しかも、包帯をされたまんまじゃ、おもらしになっちまう。がまんできなくなったら、やらかすしかないだろうけど。でも、大きい方は、もっと困るしはずかしいぞ。

6月といっても、山ん中のせいか、日が落ちるとけっこう冷えてくる。それでも、がまんを続けてると——スタッフさんだかマスターだかが、ひとりだけやって来た。

「さあ、お待ちかねの、人間にもどる時間だ。今夜は、マイコを除く全員だ」

5人が、いっせいにランドセルの背負いベルトを外し始めた。なんだ、自分で外せるんだ。おとなしく着けていたのは——ムチとか電激棒とかのチョウバツがあるからだろう。そりゃまあオレだって、手を背中にまわしたらナワの結び目を……試したりはしないぞ。おとなしくしていよう。

5人がぞろぞろと馬小屋から出て行って、後にはオレと5頭の子馬が残された。忘れかけていたというか、ずっとうずくから、それが常態になってたマンマンの痛みが、ぶり返してきた。

何時間待っても、だれも帰って来なかった。

別に運動したわけでもないけど、全身がつかれてる。あまりにたくさんの『事件』が起り過ぎて、何もかもが頭の中でブンブンうなっていて、かえって何も考えられなくて。

あきれたことに、オレはいつの間にかねむっちゃってたよ。

## 先ばいたちの調教風景

夜中に目が覚めたのは、いよいよ切羽つまってきたから。馬小屋の中は星明かりだけ。馬のシルエットは見えるけど、連れ出された5人がもどってるかは分らない。

見られてたとしても、気にする余有なんてない。ので、ボウコウをゆるめようとしたんだけど。出そうなのに出したいのに今にもちびりそうなの……出ない？

もどかしくてつらくて、なみだ目になっちゃう。

もう知らない。勝手にしろ——て、開き直ったら。ふいにじゃ口がゆるんだ。たちまち、またぐらが生温かくなって……ううう、包帯がぬれて、ぐしょぐしょになって、気持ち悪いし情けないし。

なんだって、こんな目に会わなくちゃならないんだよ。

でも、ボウコウが楽になったので、じきにまたねむりこんじゃった。

次に目覚めたときには、すっかり明るくなってた。まわりがざわついてる——ので、起こされたんだな。

「あら、おはよう。わたしたちは朝の日課に出るところ。あなたのことは、他のマスターかスタッフさんが世話をしてくれるはずよ」

5人はひとりの男に連れられて、それぞれの馬といっしょに、小屋から出て行った。

入れ代わりに入ってた来たのは、ジュニアだった。

「会員の間で争だつ戦が起きかねないんでね。調教が始まるまでは、ぼくがめんどうを見てやるよ」

サクを開けて入って来て。

「うへえ。派手にもらしてるな」

女の子に対するデリカシーの欠片もない。

「きれいにしてやるよ」

胸のナワをほどいて、足の板も外してくれた。けど、うでを背中へねじ上げられて、水平に重ねて、手首とひじにバンドを巻かれた。革の首輪を着けられて、そこからうでをつられた。

逆らうスキもなかった。ていうか、逆らっても勝ち目はないので、あきらめておとなしくしてた。

首輪に長いリードをつながれて、オレは外へ引き出された。

すぐ横にある、足洗い場みたいな所へ連れて行かれて。包帯を——ほどくのはめんどうなのか、ハサミで切り刻んで、オレをすっぽんぽんにしやがった。

足を閉じてマンマンだけでもかくそうとしたけど、ズキキッと痛みが走った。目を下へ向けると——元からぷっくりとふくらんでるところが、赤くはれ上がっていた。ぬい合わせた糸が食いこんでる。

あれ？　ぬい閉じられてて、オシッコはどこから出たんだろう——という疑問は、すぐに解消した。

ここの足洗い場には、ふみ台みたいのが置いてあった。ひざまずいて、そこへかたを乗せると、手を使わない四つんばいの形になる。ホースの先の細いノズルが、割れ目の下はしにつっこまれた。上から下までぬい閉じてあるんじゃないくて、ちゃんとスキマが作られて……

「ひゃんんんっつ……？」

上のはしにもスキマがあって、そこから水がふき出してきたんだけど。小さなイボが水流に直激された。くすぐったくて、またちびりそうになって……すげえ気持ちいい。なんでもものじゃない。マンマン全体が暴発して、ショックが脳天までつきぬけた。

「やめろ。おかしくなっちゃう……」

やめてほしくはないけど、何も考えられなくなっちまう。

「あんんっ……」

ノズルを引っこめかれて、思わず不満の声をもらしちまった。

「へええ。むきクリって、信じられねえくらいびん感なんだな。調教がはかどりそうだ」  
ムキクリ？

オレはかたをふみ台からうかして、マンマンをのぞきこんだ。皮をかぶってるはずのイボがむき出しになって、ちょこんと割れ目の上はしから顔を出していた。見る角度のせいか、ふだんの倍くらいにふくらんで、小さなチンチンみたいにとんがってた。

それ以上に観察しているひまはなかった。

かたをおさえつけられて……

「きゃっ……何すんだよ？！」

ノズルをしりの穴につき差された。グリグリとねじりながら、おしこんでくる。先細りってことは元太りだから……

「痛い……やめろよ」

「言葉使いがなっちやいないな」

でも、ねじこむのをやめてくれた……んじゃないかってくらいに、きついビンタを食らわ放して。

前に回りこむと、オレのかみの毛を根元からつかんで顔を引き起こして。

パアン！　パアン！

首がねじられてムチ打ちしょうになるんじゃないかってくらいに、きついビンタを食らわしやがった。

耳がキインと鳴って、ほっぺがズキズキ痛い。

このヤロウって、にらみつけたけど、じとつとにらみ返されて、目をふせちまった。

「まあ、いいか。人語をしゃべってられるのは今のうちだけだからな」

あの横棒のサルグツワを着けさせるって意味だろう。

いっそう強くかたをおさえつけられて、ノズルをさらにねじこまれた。

「くうう……くそお」

悪態をついたんじゃない。ピキピキとしりの穴が痛いんで、うめいただけだ。

ブジュルルル……

えっ……？！

ノズルの先から水が、すごい勢いでふき出して——腹のおくへおし入ってきた。ぐるり  
ゆりゆりゆって、うずを巻いてる。

腹が妊婦さんみたいにふくらんでくる。たちまち苦しくなってきた。

オレの腹をなでたり、ペチペチたいてふくらみ具合を確かめてから、水を止めてくれ  
ただけど。

「ヨシと言うまで出すんじゃないぞ」

無理な注文だよ。

ぐぼっと、一気にノズルが引きぬかれて。

「ああああっ……」

ぶじゅううううう……

ホースと同じ勢いで水がふん出した。水だけじゃないのは分かってるさ。

「こらえ性のないやつだな。今回だけは、大目に見てやる」

びちょちょ……

水が止まるまでに1分くらいはかかった。

すこしはなれた所から、ホースの水を浴びせられた。

本来ならブラッシングをしてやるんだが、傷にさわるといけない。そんなことを言いな  
がら、意外と優しく、タオルで身体をふいてくれた。でも、その後は優しくなかった。

首輪の前側に、からみ合ってる2本の細いバンドをつながれた。そいつを下へ引っ張っ  
て、マンマンの両わきを通して後ろへ引っ張り上げられて、手首とうでをひとまとめにしば  
っている部分につながれた。

マンマンがいつそう強く閉じ合わされて……糸でぬわれてる部分の痛みがすこし減った。  
のは、ありがたいけど。2本のバンドがひとまとめになって、しりの穴を圧ぱくしてくる

のが気色悪い。

細いバンドには短いバンドもつながっていて、そいつが胸に巻かれて乳首の上下を閉め付けられた。プチトマトをおしつぶしたくらいだったふくらみが、バンドにしぼり出されて、半割りのスモモくらいになった。もちろん痛い。なのに……

「すこしは可愛くなったな」

スモモをつままれて、ぴりりっとあまい電気が走った。

「くうう……」

痛い上にあまいのが重なって、なんでもか分からないけど、マンマンのおくがズキンってうずいた。

「トジマンコの調教はしあさってからだ。それまでは先ばいたちの調教を見学して、どういうふうにすればいいか、勉強しておけよ」

ジュニアが、小さな目玉クリップを2つ取り出した。長いヒモが付いている。

その目玉クリップを胸につきつけられて、オレは後ろへにげかけたんだけど。

「動くな」

乳首をはさまれた。

「痛いっ……」

「これくらいでいらないでちゃ、調教にはたえられないぞ」

ムチとか電激棒のことをいってるんだろう。でも、ああいうのっていつしゅんの痛みじゃないか。これは、じわじわと続くんだぞ。がまんしろって言われりゃ、できなくはないけど。

左右の乳首に目玉クリップを着けられて、そのヒモを引っ張られたら——前へ進むしかない。はだしだったけど、草地なので足は痛くない。

馬小屋の前は広い空き地で、後ろには山がせまっている。空き地は金アミのフェンスに取り囲まれているけど、何か所かに通路が開けられている。

「念のために教えておくけど、ここを何かが通過すると、あっちの建物で警報が鳴るから

ね。センサーがこわれても鳴る」

つまり。ここからにげ出そうとしても、すぐに見つかるってことか。スッポンポンじゃ、にげようにもにげられないってのに嚴重だな。

通路を出て（ここからは警報が聞こえなかった）山に向かって、オレはジュニアについて行った。歩くとマンマンが引きつれるけど、気にしちゃいけない。乳首を引っ張られたくない。

背の低い木の間を曲がりくねって続く道を3分ばかり歩いてると、子馬を引いてもどって来る5人と行き合った。タオルとかブラシを持っている。

「支度到手間取って間に合わなかったか」

5人と5頭を先に通してから、ジュニアはUターンして後ろについて行く。

「この先に小川があって、そこで馬を洗ってやるんだ。ついでに、自分もな」

オレはだまって聞いているだけ。オレたちもポニーとしてあつかわれるんだから、馬はお風呂に入ったりはしないんだろうなと、納得できないけど理解する。

5人は馬をそれぞれの区画へつないで、次の仕事に取りかかった。サクの前にスタンドを組み立てて、細長い箱を置いた。となりの小屋からバケツでえさを運んで、その箱に入れる。

「ゴシュジンサマ、ご飯です」

ミヤナさんが声をかけると、その馬がサクから顔をのぼして、箱に顔をつっこんだ。

他の4人も、それぞれに声をかける。

「ダーリン、朝ご飯ですよ」

「ぼす、たべてください」

「ダンナサマ、めしあがってください」

「Mom, breakfast is ready.」

へええ、馬って英語も分かるんだ。オレよりかしこいや。

英語はともかく、みんな敬語を使ってるな。にしても、馬に向かってゴシュジンサマと

かダーリンとか、すげえ異和感がある。

馬がえさを食べ始めると、5人もサクの中へ入った。馬のエサ箱の横に、自分たちの食事を入れたえさ箱と水飲みのバケツがつるしてある。オレが馬小屋から引き出されたときにはなかったぞ。スタッフかマスターが準備したんだろう。

5人は馬と並んでいっしょに食事を取り始めたんだけど。昨日と同じで、両手が自由なのに使わない。

「おまえのもあるぞ」

オレもサクの中へ追いこまれて。乳首の目玉クリップをはずしてもらった。じいんとしびれて、ちょっと気持ち良かったりした。

もう、ていこうも感じなくなっていたので、それに、ずっと手を後ろでしばられてるし——オレは素直に犬食いで食べた。水を飲むのには、ちょっとしたコツがある。バケツのふちをくわえて、こぼれない程度にかたむけるんだ。これは、本物の馬の方が楽だよな。下に置いてあるバケツに顔をつっこめばいいんだから……人間だったら、おぼれちゃうか。

馬のえさは干し草で分量があるから、馬少女の方が先に食べ終わる。5人とも、サクのかたすみにもたれかかったり座りこんだりして、ダーリンだかボスだか自分の馬をぼけっとながめてる。

オレは、それ以上にすることがない。下手に座ってマンマンの傷にバイキンが入ったらまずいので、サクにもたれて。あらためて、しげしげと、ぬい閉じられたマンマンを観察した。

じゅくしたイチジクを4つ割りにして張り付けたみたいにふくれてる。合わせ目をつなぐタコ糸はどす黒く血に染まっているけど、元は割れ目だった一本筋は、今朝の放水で洗われてて、意外ときれいだった。

下側のスキマは見えないけれど、上はしは良く見える。ふだんは皮に包まれてる小さなイボが、びよこんとつき出ている。これ、『クリ』とか言ってたな。皮の上からさわっても、オシッコをちびりそうになるくらい気持ち良いんだから、じかにさわった……りなんか、

しないぞ。ぬい目に指がふれたら、そこからバイキンが入る。

だいいち。こんなわけの分からないひどいことをされて、エッチばい気持ち良いことをする気になんか、なれない。

ぼけっとしてる時間は短かった。どやどやと数人の男が馬小屋へ入って来て、オレたちを外へ連れ出したんだ。

オレはジュニアにまた目玉クリップを着けられて引き出されたんだけど。他の5人は、ややこしいことをされてた。

馬小屋の前に小さな人力車（ていうか、2輪馬車だよな）が5台並べられてた。座席の後ろに、アンテナみたいなのが2本立っている。まさかラジオ……じゃねえな。1本は見覚えのあり過ぎる電激棒だ。もう一本はムチだな。

5人は、ひざまであるヒールの高いブーツをはかされた。口にハミをかまされて、頭の後ろに細いバンドで留められて。チブサの下からしりの上までである腹帯を着けられて（だから、オッパイもマンマンもむき出しのまま）、腹帯の金具にひじの上をバンドで固定されて、乳首にタコ糸を結ばれて手首とつながれて『小さく前へ覚え』。昨日ちらっと見たまんまに、スズも手首からつるされた。

2輪馬車からリヤカーみたいのにのびている2本の引き棒の間に立って、引き棒と腹帯とをがっちりにつながれた。

5人の男が、それぞれの馬車に乗りこんだ。右手には電激棒を持っている。

アメリカ人、たしかコーチだっけ。こいつは、その様子を見わたしながら、ときどき男に向かって何か言っていた。言われた男は、腹帯の閉め加減を直したり、スズをつるす高さを調整したりしてたから——つまり、コーチが先生で他の男は生徒ってことか。

5組の支度が終わって横一線に並んだ。

「*Show the new pony the results of your training.*」

コーチが、おそろしく長いムチをひゅううんとふるった。

パシイン！

ムチの先っぽがミヤナさんのしりに当たった。

「ゴーアヘッ！」

その馬車に乗っていた男が、カンパツを入れずにさけぶと。ミヤナさんは身体を前へかたむけてふん張って。ゴトンと馬車が動いた。

「ゴーアヘッ」

他の4人も声をあげた。だけじゃなく、電激棒でそれぞれのポニーのしりをチョンツとつついた。4人とも、悲鳴をあげたりせずに、同じようにふん張った。ミヤナさんより身体のおし方が大きいのは、軽い体重で重い馬車を引かされるからだな。

でも、静マサツが動マサツになると、身体を起こして、ひざでスズをけり上げながら進み始めた。

シャン、シャン、シャン。10個のスズが鳴って、次第に足並みがそろっていった。

オレも乳首を引っ張られて、後からついて行かされた。

「ドーオ、ドオドオ」

「ハリイ」

男たちは馬車の横一線を保とうとして、ポニーに声をかけながら電激棒でしりをつつく。声より電激棒が先でも、ポニーはそんなにおどろいていない。電圧が調整できるようになってるんだよな。オレは50でじゅうぶん以上に痛かったし、最大にされたときは大声でわめいてぶったおれたもんな。きっと、今は10とか5なんだろう。

足を高く上げてるから走ってるように見えるけど。乳首をいじめられてマンマンのぬい目が引きつってるオレが楽に（じゃない！）ついて行けるだけじゃなく、前へ出たり横に並んでいろいろと観察できる（させられてる）。

でも、その割にはミヤナさん以外の4人は歯を食いしばって、苦しそうにしてる。早くも、うっすらとあせをかいている。そりゃ、まあ、そうかもしれない。馬車に乗ってる男は、引かされてる子の倍くらいは体重があるだろうな。

オレもやらされるんだよな。ジャパユキンちゃんだってかんばってるんだから、やれる

よな。うん、『ちゃん』だ。パスポートでは5個上でも実際は半個ちがいらしいし、オレよりも小がらだもの。でも、きっちりチブサと言えるだけのふくらみがある。オレと比かくしたやつがAAカップと言ってたっけ。

くそ、ゼロカップだなんて言いやがった中年デブのやつ。シカップさんの引く馬車に乗って、ちゃんと列をそろえて引いてるのに、電激棒で何度も何度も、しりだけじゃなく背中やかたまでつついてる。弱いものいじめをするなんて、最低だ。

草地を囲むフェンスのすぐ向こうは、びっしりの雑木林になってる。

フェンスの手前で止めた馬車から男たちが降りて。それぞれの女の子の前にしゃがんで、なにかコチャコチャとやってる。

「お前も、あれが気に入るようになるぞ」

また乳首を引っ張られて、すぐ近くまで寄せられた。

「……………」

ずっと年上のミャナさんまで全員が、毛が生えてなくてマンマンが丸見え。その割れ目の上のクリをいじられてる。皮をむいて中身をおし出して、指ぬきみたいな輪っかをはめて。輪っかには、ガスのホースを元センに固定するネジみたいのが付いてて、それを小さなドライバーで閉めつけてる。

ミャナさんは平気な顔をしてるけど。

「くうんん……」

メコチョーキョさんは、痛いのか気持ち良いのか分からないうめき声をもらしてる。

「Ohhh,ache. Please,do'nt…」

ホワイティーナさんは、痛がってる。こっちは『さん』付けになっちゃう。2個しかちがわないけど、いちおうは年上だし。なによりも、見た目だと、5個上のシカップさんよりおとなっぽいもん。

指ぬきには、細いクサリがつながってる。男が、そのクサリを引っ張って歩き出した。女の子も歩く。オレが乳首であやつられてるのと同じだ。

でも、そんなには痛くなさそうだし。馬車も空荷だし。

シャン、シャン、シャン……スズの音も軽やかに、行きよりもぴったり足並みもそろってた。のは、1分も続かなかった。足並みがそろわなくなった。歩はばが小さくなって、スズをける高さまでひざを上げられないみたいだ。

シャンシャンシャンシャン……でも音が續いてるのは、ミャナさんとシカップさんだけは、へばってないから。ていうか、スズがはねおどってる。ピッチも早くなってきた。

そうだった理由は、オレも同じ『イボ』を持ってるから想像できる。がんばってる2人は、気持ち良いんだ。へばってる3人は、痛みの方が強くて足を動かせないんだろう。

男どもは容しゃない。

「進め。動けないのなら、後ろからおしてやるぞ」

電激棒を見せつけながら背後へまわって、チョンチョンとつついた。

「ナウ、レベル・ワン。オア……インクリーズ、マックス」

じゅうぶんに意味が通じたんだろう。ホワイティーナさんが、ぶるんと頭をふってから、元のペースで歩き出した。

メコさんもすぐにペースを取りもどした。ジャパちゃんだけは、逆にうずくまってしまった。

ジャパちゃん係りの男は、チキチキと電激棒の目盛をまわして。針の根元が肉にうまるまで、一気につき差した。

「ぎゃあゝあゝあゝあゝっ……！！」

ジャパちゃんが前につんのめった。

「ぎひいいいっっ！！」

手をつこうとして、手首にタコ糸でつながってる乳首を自分で思い切り強く引っ張ってしまった。チブサをかばうような感じで、ジャパちゃんは顔面から草地につっこんでしまった。土はやわらかいから、けがはしなかったみたいだけど。

「masakit! Patawarin mo sana ako!」

母国語でさけんでるけど、ホワイティーナさんよりも分からない。

「シャラップ。スピーク、ジャパニーズ」

男が電激棒でペチペチとしりをたたいた。通電してないみたい。

「……ごめなさい。がんばります。ゆるしてください」

ジャパちゃんも落ち着きを取りもどして、よたよたと立ち上がった。

シャンツ……シャリ、リン……スズをうまくけり上げられなかったりするけど、なんとか前へ進んでる。

オレはジュニアに強く乳首を引っ張られて、早足になった。ジャパちゃんを置き去りにして、ずっと先を行ってるミャナさんを追いかけた。

馬小屋の前へ着くと、5人は馬車から外されて、『ポニー装備』でやつも取ってもらって、またすっぽんぽんで自分の区画（馬ボウというんだそうだ）へもどって、ひと休み。

オレも目玉クリップを外してもらって、でも、うではしばられたままで、首輪から縦に走ってマンマンを左右から閉めつけているバンドも外してもらえなかった。そのまま、また昨日のようにわきの下でつるして立たされて、まあすこしは楽ちんだったかな。

30分ほど休んだ後は、次の調教が始まった。今度は<sup>ドンキーガール</sup>ロバ少女。

ポニーガールのときと同じコーチとマスターたち。に加えて、オーナー。ジュニアはオレの係り。

最初は、キンバクから。両手を背中へねじ上げて、手首を交差させてしばって。長く余ってるナワじりで胸の上下を巻く。チブサの谷間に2本目のナワを通して上下のナワを引きしばって、左右に分けてわきの下を通してここでも上下のナワを引きしばった。

ミャナさんとシカップさんは、アニメのオッパイミサイルみたいになっちまった。ホワイティーナさんとメコさんは、まあ、ボインだな。ジャパちゃんは、AAカップからBカップに成長した。うらやましくなんかないぞ。オッパイの大きな子なんて、体育のとき持て余してるもんな。

キンバクはオーナーの指導だった。5人のマスターたちも、これが初めてってわけでもなさそうで、テキパキもモタモタも居たけど、全員がオーナーから合格点をもらった。

女の子たちもオレと同じではだしだったけど、ゾウリみたいなをはかせてもらった。ものすごく短くて、土ふまズのあたりでちょん切れている。かかとは直に地面をふむんだ。

ハナオに親指を通して。足のこうにヒモでしばり付けてもらったのは、ぬげない用心だな。

男の人が女の子にゾウリをはかせてあげるだなんて、主従が逆転したみたいだけど——考えてみりゃ、馬にいて鉄を着けるのは、調教師の役目だ。

半ゾウリを着け終わったところで、オーナーからコーチへバトンタッチ。

「わしは<sup>おもて</sup>表の仕事があるので」

原チャリに乗って、オレがミャナさんに引かれて来た道を、その<sup>おもて</sup>表の牧場へ帰って行った。「帰る」でいいんだよな。ジュニアは、オレたちが入れられてる馬小屋にならんだ家にねとまりしてるけど、オーナーとマダムは『表』の牧場にある建物（こっちの方が大きいし数も多い）に住んでるみたいだから。

馬小屋のとなりにある物置小屋から、マスターたちが荷車を引き出した。ミャナさんが引かされてたのと同じ。それが5台。

荷車はゆかが木製で、座布団2枚を前後に並べたくらいの大きさ。三方が金属パイプのワクで囲まれてて、後ろは開いてる。こっちも2輪だけど、タイヤが人力馬車よりも太い。あっちは自転車サイズで、こっちはもろにリヤカーのタイヤ。

リヤカーとも人力馬車ともちがうのが、引き棒。ゆかの下から1本だけつき出でて、真ん中あたりで、へビがカマクビを持ち上げるように立ち上がって、また水平にのびている。

その先っぽから30センチくらい手前に、ぶっとい鉄の棒が垂直に立っている。これが、ミャナさんのマンマンにつき差さってたんだ。鉄の棒の先が丸くなってるのは、入れやすくしてあるんだろうな。

5人は、それぞれの荷車の前にしゃがんで、そのぶっとい鉄の棒を——ペロペロとなめ

たり、口に入れてしゃぶったり。そして、ガニマタになって、引き棒をまたいで立った。

オーナーが引き棒の先を持ち上げる。5人は自分でこしを動かして、割れ目に鉄棒の先をあてがった。オーナーが引き棒を左右に細かくゆすりながら、さらに持ち上げると――鉄棒はズブズブと割れ目の中へ入っていった。

「あんんっ……」

「くうう……」

「きついよおお」

「*I'm being fucked...*」

「*Masakit, pero masarap sa pakiramdam.*」

苦しそうなうめき声と、うっとりしてるような鼻声と。それが5人ともびみょうに入り混じってる。

引き棒の前と後ろには金属の輪っかが付いている。そこにナワが通されて、こしに巻き付けられた。コーチがナワの張り具合を1本ずつ確かめて、マスターに調節させている。前のナワはピンと張って、引き棒がずり下がらないようにした。逆に後ろのナワは、ゆるい目だ。

最後にハミをかまされて、出来上がり。

5人が横一線に並ぶと、背たけがちがうので、引き棒の水平具合はちょっとずつちがうけど、ぱっと見た目にはそろっている。

進むのは1列縦隊。先頭はメコさん。電激棒で電極の針を差すんじゃなく、Y字形のところでしりをたたかれて、歩きだした。

その後ろに、ジャパちゃん、ホワイティーナさん、シカップさんの順に続いて、しんがりがミヤナさん。マスターたちは、ロバ少女の左右左右左と、テレコちがいいになって後ろに付いている。

みんな、足をけりあげたり身体をたおしたりせず、(わりと) 平然そうに歩いてる。引き棒の後ろからこしへつながってるナワはたるんでるから、マンマンにつき差さってる棒だ

けで引っ張ってるんだよな。

女は強しっていうか。これが本当のマンパワー。アホな考えがわいてくるくらいに、牧歌的な風景だ（どこが？）。

オレも、乳首の痛みがあまり気にならなくなってきた。白っぽくなってる。血行がさまたげられて、神経がマヒしたのかな。

ポニーのときより、さらに歩みはおそい。わずかだけど上り坂になってるから、そのせいもあるかな。おそいおかげで、マンマンの引きつれも、左右からはさみ付けられてる異和感も、あまり感じなかった。

道はほ装されてるけど、はばはせまい。軽自動車でも通れないだろう。

道の両側は、せいぜい5メートルくらいの高さの切り立った岩はだになってるけど、進むにつれて左側だけが低くなって。昨日ヘリコプターで連れて来られた牧場の建物が見えてきた。牧場の原っぱは、建物のかげで見えない。昼日中からすっぱだかの女の子が歩いてても、こっちの牧場からは見えないようになってるんだ。

建物の裏手が終点だった。オレが荷車に乗せられた場所だ。そこには、スーパーの買い物カゴ（にそっくり）が20個くらい並べられてた。生せん食料品にトイレットペーパーにボトル飲料やビールのケースや……とにかく、日常生活に必要な物資がぎっしりだった。他に、お米のふくろと小さ目のプロパンガス容器もあった。

まず、1列縦隊のままでマワレミギ。実際には荷車を中心にして、自分がカニ歩きで半円をえがいた。それから、5人のマスターが手分けして荷物を積みこんだ。一番重たそうなプロパン容器はミヤナさんの荷車に、その次のお米はシカップさんに。シカップさんの荷車には買い物カゴも2つ乗せられた。メコさんはカゴが7つ。ホワイティーナさんは5つ。ジャパちゃんは3つ。体力の差が、ちゃんと考えられてる。

積みこみが終わったら、こしに巻いてあるナワの調節。後ろへのびてるナワが、直立してもピンと張るところまで縮められた。これなら、身体を前へたおせば、マンマンの鉄棒だけじゃなく、ナワでも荷車を引ける——はずなんだけど。

「ゴーアヘッ」

電激棒でしりをつつかれて、5人はけんめいにふん張るんだけど、荷車は動かない。

「ホーオ！ ゴーアヘッ！」

つつくんじゃなくて、はっきりと電激棒をつき差した。

「み<sup>ゝ</sup>やっ……」

「びひいっ……！」

「あおおっ……」

びくんと身体をこわ張らせて、いっそう前にかたむけて、ぐううっとふん張って。

ゴトンと、荷車が動き始めた。静マサツから動マサツに変わったので、身体をすこし起こして進み続けた。

オレは5組の後ろについて行く。

荷物を乗せていても、そんなにつらくなさそう。来たときとあまり変わらないスピード（おそさ）で進んでる。ああ、そうかと、オレは納得した。今はゆるい下り坂なんだ。もしも、これだけの荷物を引いて坂道を上がるとなると……つらいっただけで済むだろうか。マンマンに棒を入れて、それを前へおしてるんだぞ。すごく痛いんじゃないかな。

同情とかしてる場合じゃない。3日後からは、オレも同じことをさせられるんだ。

……じゃ、ないよな？

オレのマンマンはぬい合わされてる。鉄の棒をつっこめない。じゃあ、このドンキーガールってやつは、やらされなくて済むのかな。ほっとするような、他のみんなに申し訳ないような。

二輪馬車引きでシカップさんをいじめてた中年デブは、荷車引きでも同じように、必要もないのに電激棒でつつきまわしてる。馬車に乗ってなくて自由に動き回れるので、腹とかチブサにまで電激を食らわしてる。さすがに目盛を小さくしてるんだろう。シカップさんの悲鳴は小さいし、それで立ち止まったりうずくまったりはしなかった。でも、Y字形の先っぽの針はするどいんだろう。小さな赤い2つ1組のポチポチが、身体じゅうに増え

ていつてる。

10分くらいかけて、500メートルくらいの道のりを歩き切った。

5人は荷車から切りはなされて、キンバクもほどいてもらって。でも、ハミはそのまま。運んで来た荷物を降ろして小屋へ運ぶのも、女の子たちの仕事だった。

オレは、ぼけつつ立つて作業をながめてるだけ。なんだか、申し訳ない気分になっちまった。

作業が終わるころには、日も高くなっていた。オレも、やっとバンドとか首輪を外してもらって、馬ボウへもどされた。けど、すぐに引き出されて、身体検査とか（思い出すだけで気分が悪くなる）インシンをほう合された小屋へ連れてかれた。

また、ドクターじじいが待っていやがった。昨日みたいにおおぜいの見物人が居たりはしなかったけど。

また、足乗せ台付きのベッドにねかされた。しばらくつけられはしなかったけど、足を閉じようと思えば出来るのに、がばっとおっ広げてなくちゃならないのは、いくらオレでもすこしは、はずかしいぞ。

「ふむ。若いむすめは治ゆ能力も高いな」

ドクターは、そんなことをつぶやきながら。パチン、パチン……ぬい閉じた糸を小さなはさみで切った。

「あう……？」

目茶苦茶くすぐったい。顔をうつむけてそこを見ると——ピンセットでつまんで糸をぬいていた。

5か所の糸を全部ぬいて。指を割れ目の左右にあてがって、広げようとする。

「つつ……」

ちょびっとだけ痛かった。

「針を差して出来た傷同士がゆ着してきとるな」

て、おい……そんな、二度と開かなくなるのかよ？ そんなの困る……ことって、何

かあるのかな。おとなの男女は、チンチンをマンマンの中の穴に入れるっていうけど、そんな気色悪いことなんか、出来なくなったっていう。出来ない方がありがたいぞ。

「しっかりとゆ着させてあげよう。おじょうちゃんがパパと結こんするときは、ウェディングケーキならぬ処女マンコへの入刀ということになるね」

まるきり意味不明だし、オレとパパが結こんなんて、絶対にありえないぞ。

「ひっ……」

また、昨日と同じ曲がった針と、それにつながったタコ糸を見せつけられて、オレはすくみ上がった。

「いやだ！ やめろ……てください！」

しおらしくお願いした。むだとは分かっている。暴れてドクターの手元がくるったら、もっと痛いことになりそうだから、もがいたりもしなかったけど。

「だいじょうぶ、だいじょうぶ。今度は、ちっとも痛くないからな」

ほんとうだった。もう穴が明いてるから、そこへ針を通すだけだった。針が冷たかったり糸が通るときに（ちょっとだけ痛くて）くすぐったいだけだった。

ので、あらためてぬい閉じられるのを、ずっと観察してた。真っ白な糸になったし、マンマンのはれもすこしは引いていたので——糸の結び目が小さなりボンみたいで、けっこう可愛い感じになった。そうでも思わなきゃ、泣きだしちゃうよ。

——馬ボウへもどされて。もう、ナワでつったりはされなかった。みんなと同じに、ランドセルの背負いベルトだけのやつで、おくのかべにつながれた。胸のところに左右をつなぐ留め金具があるので、これを自分で外せば本体もぬげる。でも、みんなを見習って、勝手なことはしない。

ドクターの許可が出ているので、ワラの上に座って。次に何が起きるのかを待つだけだった。

最初に起きたのは、昼の食事。エサかな。朝と同じように、先に子馬にエサやりをしてから、女の子たちのご飯。馬ボウの前につるされた箱に入れられた、今度はオニギリとゆ

で玉子とキュウリ1本まるごとだった。オニギリはやたらと塩からかったけど、キュウリはマヨネーズがまぶしてあったので、おいしかったかな。にしても、やっぱりご飯じゃなくてエサだよなあ。

食事の次は、馬ボウのそうじ。ランドセルの背負いベルトみたいなのは、自分で外して自由に動けるようにして。馬小屋の外まで自由に動き回って。馬フンやらオシッコにまみれたワラを捨てて、新しいワラをしきつめて、おくのかべ際に分厚く積み上げるのは、自分のベッド。それが終わると——おどろいたことに、自由時間だった。

しかも。メコさんとホワイティさんとジャパちゃんは、木箱の中から教科書を取り出して、木箱を机にして、勉強を始めた。

「勉強するんだ」

思わずつぶやいたら、ミャナさんにたしなめられた。

「当たり前でしょ。調教が終わったら、それぞれのご主人様の元へ帰されるのよ。自習しておかなくちゃ、取り残されるでしょ。まあ、ジャパユキンは日本語の勉強だし、わたしとシカップボインは、もう卒業しちゃってるけど」

「……でも、オレは何も持って来てないです」

「そのうち、馬主様が手配してくださるわよ。あ、それから。ポニー同士は敬語を使っちゃダメ。敬語は、牧場の人たちとお客様にだけ」

お客様ってのは、マスターとレディのことだ。このポニー牧場の会員で、とまりこみで調教に来る人もいれば、調教成果のおひろめ会を見物に来るだけの人もいる。厳密に区別するときは、『ゲスト』と呼ぶんだそう。けど、それはあいつらの間での話で、オレたちは全部『マスター』と呼んでおけばまちがいはない。なんだったら、コーチやドクターもジッパヒトカラゲにしたって（たいていは）しかられない。

「それと。おたがいの名前を呼ぶときは省略せずに、サンとかは付けちゃいけない。トジマンコは入キュウすぐだから大目に見られてるけれど、言葉使いはうるさいのね」

ミャナさん——じゃなくて、ミャナカンツォーネか。でも、それは口に出して言うとき

だけでいいと思う。

ミャナさんはオレから目をそらさずに、指だけで天上の何か所かを差した。そっちを見ると、監視カメラとか集音マイクとかがあった。

「あれは、あまり気にしなくてもだいじょうぶ。ビデオにも録ってるらしいけど、まさか全部を24時間分チェックしてはいないでしょ。してるんだったら、ご苦労様だね」

オレたちへのケンセイだと、シカップさんがくすくす笑った。笑えるってことは、こんな目に会わされても絶望してるってわけじゃないんだ。

何をケンセイされてるのか分からないけど。すっぱだかでにげ出す度胸があったとしても、センサーのある出入口をさけてフェンスを乗り越えたとしても。近くに村がないのはヘリコプターから見て知ってるし。オレたち全員が反乱をたくらんだところで、オトナの男と小さくないのはミャナさんだけだ）な女の子。多勢に無勢。すみっこのバケツで用を足すのだって、見られたところで今さらだよな。

他にも、ミャナさんはいろんなことを教えてくれた。

本物の馬を飼っている方は赤<sup>あかとめ</sup>留牧場といって、食用馬を飼育している。ので、人の出入りも激しい。

こっちは、正式には赤<sup>あかとめしんぼ</sup>留新舗牧場——と、わざわざ言うのはオーナーくらいで、マスターやゲストはポニー牧場と呼んでいる。

そして、これがものすごく大切なことなんだけど。ポニー牧場は3月の中ごろから9月末くらいまでしか運営されない。その後は、オレたちは馬肉にされたりはしないで、ご主人様の元へ帰される。だから、あと4か月足らずしんぼうってわけだ。

4か月なんて、すごく長いぞ。しかも、オレへの調教は他の5人より厳しくなると、ミャナさんがおどかす。

話に出てきた『おひろめ会』は、6月の初めと8月の終わりにある。他の5人はすでにひと通りの調教を受けていて、6月の『おひろめ会』で演技(?)をひろうしている。こ

れからは、さらに高度な調教を受ける。そしてオレは、8月の『おひろめ会』で、みんなに負けない成果をひろうしなくちゃならない。ハードな特訓が待ってるってわけだ。

でも、結局は……ご主人様に忠実に従順になるように調教されるんだろ。それって、つまり……ドクターが言ってたパパとの結こんの意味が、分かってしまった。

「そうそ。ここでのあたしたちは、ポニーとドンキーだけじゃないよ。一番大切に一番いやな役割はセイドレイね」

制度礼？

「トジマンコも、おしりとお口は会員に提供されるって話だから……」

「わたくしは、かわいそうに思う、ちっともないです」

ホワイティーナさんも話に加わってきた。けど、なんか引かかる言い方だな。

「わたくし、トジマンコより小さい年令、*daddy* と *daddy* の弟と *mom* の兄と、3人に、いっぺんに *virgin* ささげるをされました」

バージンで英語くらい知ってる。ダディはパパでママはママだよね。てことは……きちんと理解しない方が良くないと直感した。

なんか中と半ばにおしゃべりが立ち消えて。

勉強なくて良いミャナさんは、古ぼけた文庫本を読み始めた。シカップさんは、ワラのベッドによこたわって、お昼ねかな。

——夕方になって。朝と昼と同じように、馬と自分へのエサやりが終わって。

そして、メコさんが言ってた、一番大切に一番いやな時間が始まった。

## 夜毎の務めは性ドレイ

夜になって、マスターのひとりとジュニアが馬小屋を訪れた。

「人間にもどる時間だぞ。今夜は、リウミンとレズリーの2人だ」

ジャパちゃんが無表情に、ホワイティーナさんはあからさまに口をとんがらせて立ち上がった。それでも、慣れた手つきで背負いベルトを外した。

「それと、マイコはO J Tな。キリエが指導してやってくれ」

ミャナさんが、ため息ぼく立った。

そうか。今のが本名なんだな。

オレも自分で背負いベルトを外した。

すっぱだかで連れて行かれたのは、一番はしっこにある一番大きな家（小屋って規模じゃない）。ジャパちゃんが入ってすぐの部屋へ送りこまれて、ホワイティーナさんはマスターに連れられて別の部屋へ。オレとミャナさんはジュニアといっしょに一番おくの部屋だった。

え……？

そこには、4人の男の人が待ち受けていた。オーナーとドクターと、昼の調教では見かけなかった——ドクターより老けてる感じの（でも、カクシャクって印象だ）じいさんと、ジュニア以上オーナー未満のがっちりした、10年前はお兄さんだったくらいの人。みんな、ゆったりしたバスローブみたいのを羽織って、部屋の左右にあるふたつのソファーに分かれてこしかけてる。正面には大きなベッドが置かれてる。変な家具配置だな。

「まずはシャワー完腸ですね。お二方にお願いできますか？」

オーナーが、「まずはごあいさつから」みたいな感じで、シレッと言った。シャワー完腸なんて初めて聞く言葉だけど、足洗い場でやられたあれだなど、見当はついた。

「いやいや、その前にこれじゃよ」

じじいと言ったこれは、ナワだった。

「最初から、それですか。さすがにかわいそうだと思いますねえ」

ジュニアの声は、でも、面白がっているように聞こえた。

「引導をわたしてやるんじゃないよ。しばらくれば、あきらめもつくじゃろう」

「なるほど。それも一理ありますね。ということで……」

オレはかたをおさえられて、じじいの前にひざまずかされた。

じじいは年寄りらしくなくキビキビと動いて、おれの両手を背中へねじ上げた。

「やめろ。何をするんだよ?!」

「こうするんじゃ」

手首をしばられて、そのナワで胸の上下を巻かれた。わきの下にもナワを通して、二のうでを閉め上げられた。ドンキーガールのときに見たしぼり方に似てたけど、胸の上下のナワをしばられはしなかった。そんなことをしても、プチトマトがスモモになるだけだもんな。

「ていこう出来なくなったところで、観念してこれをしゃぶっておくれ」

うげ。なんてことしやがるんだ。じじいのやつ、バスローブの前をまくって、パンツをずり下げて——でろんとうなだれてる（でも、マーブルチョコのつつくらいもある）チンチンをオレの顔につきつけた。

顔をそむけたら、両手でつかんで正面を向かされた。

「オカッパはやりにくいな。やはり、女の子は長ハツに限る。オサゲなら、言うことなしじゃが」

「タヅナになりますよね」

ジュニアが、ふざけたことを言いやがる。

「そら、あーん」

うべ。くちびるにチンチンをおしつけられた。こんちくしょう！

頭つきを食らわせてやった。いやがってにげようとするオレを引き寄せようとしてたところだったから、自分で自分の腹にオレの頭をめりこませたようなものだ。

「このガキが！ 優しくしてやれば、つけ上がりおってからに」

「まあまあ。無理強いは良くありませんな」

オーナーのやつ、シレッと言いやがる。昨日からこっち、無理強いばかりじゃないか。

「頭つきで良かったじゃないですか。かまれでもしたら一大事でした」

「ふん。それでは、先にそちらさんに、太いオキユウをすえてもらいましょうか」

「やぶさかではありませんが。オンタイにザゼン転がしをお願いしますか」

10年前のお兄さん（つまり若オヤジじゃんか）が、訳の分からないことを言った。たいていは、次の動きで訳が分かるようになるってのが、昨日からの学習成果だ。

オレはジュニアの手でアグラを組まされた。目玉クリップで引き回されたりして、でもジュニアには電激棒を食らってないし、なんとなく、逆らえない気分になってきてる。

アグラと言ったけど、ふつうのアグラじゃなかった。足首を持ち上げられて、反対側の足の太ももに乗せられた。それを左右ともやられると、自分では足をほぐせない。なのに、じじいのやつ、重なったすねをナワでしばって。そのナワを首に巻いて引きしぼった。

上体が45度まで折り曲げられた。これくらいの前くつはどうってことないはずなのに。アグラと後ろ手のせいか、背骨がミシミシきしんだ。

「見事なお手並みですね。では、下準備をしていただいたところで、料理に取りかかりませんか」

若オヤジが、よっこらせとソファーから立ち上がって。ゆっくりとオレのかたに足を当てて、あお向けに転がしやがった。

ぐうう……痛い。首とすねをつないでるナワを持って、オレをカバンか何かのように持ち上げやがった。

文句を言ったって無視されるか、もっとひどいことをされるだけだから、がまんしている。

オレはとなりのバスルームまで運ばれて、タイルの上に元の形に座らされた。頭にシャワーキャップをかぶされて、今度はジュニアとふたりがかりで（しりと両わきを支えて）持ち上げられて、バスタブの中に転がされた。両ひざと両かたを着けた——これも、四つんばい的一种かな。

若オヤジがシャワーを手にとって、ジョウロの部分でねじって外した。

やっぱりな。朝に足洗い場でされた、あれだ。

しりの穴にぴとっとホースの先がおしつけられて。

「力をぬいてないと痛いぞ」

ぐりぐりとねじこまれた。

ちょっとは痛かったけど、ノズルみたいに元太りになってないから……10センチくらいはおしこまれたぞ。

ぶじゅるる……腹の中に、水がうず巻きながらおし入ってくる。気色悪い。

腹がふくらんでくのが、見えなくても分かる。

「クソがとけるまで出すんじゃないぞ」

水は止まったけど、ホースをぬいてくれない。

水が止まったしゅんかんから、もうれつにウンコを出したくなった。でも、ホースがセンになっている。

「くうう……」

ぬいてくれるまでがまんしようと思ったけど、とても無理だ。じとっと油アセがにじんでくる。

「お願いだ。ぬいてくれよお……ぬいてください」

「泣いてお願いしたら、考えてやろう」

若オヤジめ、オレを見下ろしながらタバコを吸い始めやがった。ふううっとけむりをはいて。灰をオレの背中に落としやがる。熱くはないけど、灰皿あつかいにされるのが、くやしい。

だれが、泣いたりするもんか。

「ぐうぐうぐう……」

それまではソソウをしないように、しりの穴に力を入れてつぼめてたんだけど。なるようになれって、逆にいきんでみたら。

にゅるんとホースがすべって。

ぶじゃああああ……びちちょ。水がふき出してから、ひと呼吸を置いて、水のはね返

る音と、それがしりと足にかかって、顔のところまで流れてきた。ばっちい。シャワーキヤップの意味が分かった。

「ぬかぬなら、ぬいて見せよう、シャワホース——か。面白い子じゃな」

勝手に言ってる。

水が止まったら、またすぐにホースをつっこまれて、同じくらいの水を注入された。今度はホースをずっとおさえられてて。いきんだら、びじゅじっと、穴とホースのスキマからふき出した。

チッと、若オヤジが舌打ちをして、ホースを引きぬいて。

ぶじゃあああ……バチイン！

「痛いっ……」

水をふき出している最中に、ホースでしりをひっぱたかれた。

へん。電激棒に比べたら……くそお、痛い。

「まったく、なんてガキだ」

オレの上にうでをかざして、ホースの水をかけた。左を向いておしつけられている顔に、ばしゃばしゃと降りかかる。

「気をつけてくださいよ。父親の金玉をけ飛ばすようなじゃじゃ馬ですからね」

「まったく……」

若オヤジは2本目のタバコに火を点けた。けど、一服しただけで。

「きひいいっ……熱い！」

オレのしりにタバコの先をおしつけやがった。

「ゴメンナサイくらい、言えんのか？」

オレは何も悪くない。

「ふん」

若オヤジはタバコを引いて、スパスパと吸った。そして、またおしつけた。ぐりぐりとねじつける。

ジュッ……熱い！ 痛い！

「ごめんなさい！ ごめんなさい！」

大声で連呼した。タバコの火くらいで降参したんじゃないぞ。強情を張ってたら、電激棒が出てくる。あれだけは絶っつ対にイヤだ。泣いてるんだって、熱かったからじゃないぞ。灰皿代わりにされたくやしなみだに決まってるだろ。

「素直になったところで、言葉使いも仕付けておきましょう」

あらためて、きちんと敬語を使うように申しわたされた。

「申し訳ございません、マスター」

言い直しをさせられた。

それで、やっと許してもらえた。しりを洗い流されて、身体を起こされて顔にも水を浴びせられて、シャワーキャップをはがされた。でも、ナワはほどいてくれなかった。

またふたりがかりで運ばれて、ベッドの上でバスタブの中と同じ四つんばい(?)の形にされた。

これって、ザゼンよりもずっとはずかしい。マンマンを見られるだけじゃなく、しりをつき上げて、そっちの穴まで見られるってより見せつけてる——と、ふつうの女の子だったら思うんだろうけど。いや、オレだってふつうの女の子だぞ。男子に水着をみられたって平気なのと同じくらいに、パンツを見られたって平気なだけだ。

すっぽんぽんだって、うすっぺらい布1枚のちがいないじゃないか。

「ひゃんっ……?!」

しりのおくにヌチャッとした何かをぬられた。指でしりの穴をこねくられてる。気色悪くて、くすぐったい。

「まだ固いな。キリエ、きん張をほぐしてやれ」

「乳だけにしておくように」

じじいにドクターが言いそえた。老人ふたりで、孫のような女の子をいじめる相談かよ。

「はい」

はずんだ声で返事をして、ミヤナさん（じゃなくてキリエさんだけど、ロバでこき使われてる姿が、強れつに焼きついてるので）が、オレの横にべたんと座った。

「わたしたちが知ってる気持ち良いこと、あなたにも教えてあげる」

ゆかに手をはわせて、胸の下に差し入れてきた。

「ひゃっ……エッチなことはやめろよ」

ピリリッと乳首に（痛くないけど）くすぐったい電気が走って、オレは文句を言った。乳首をさわるのが、なぜエッチなのかは知らないけど、みんな（先生もクラスメートも）言ってるぞ。

「エッチなことだから、気持ち良いの」

さわさわと乳首の先っぽをこすったり、乳首をつまんでふにふにふにともんだりされて、電気のピリピリがさざ波のように乳首から……マンマンに伝わる。胸とこしが、切なくなってくる。しりの穴をもみほぐすじじいの指までが、くすぐったいのを通りこして気持ち良くなってくる。

「けっこう感度がよいわね。自分でもオイタをしてるのかな？」

どういう意味だろ。乳首はさわっても、くすぐったいか痛いかだけで、こんなふうに電気が走ったことはない。

「あひゃんっ……?!」

もうちょっとするどい電気が、乳首の先っぽを走った。何をされたか……もしかして、つめでひっかかれたのかもしれない。

「クリトリスも可愛がって良いですか？」

「ダメだ」

ドクターが速答した。

「包皮もぬってある。まだし激するな」

「ちえええ」

「もう、じゅうぶんだ。ぬい目にマンジルがにじんできた」

「きゃひやああっ……?!」

ずぶっと、しりの穴に指をつっこまれて、またまたオレはスットンキョウな声を出しちゃった。指なんて、ノズルに比べりゃ細いから、まるで痛くなかった。

でも、中をぐりぐりとこねくられたら……痛くはないけど、気色悪い。

「ぐうう……痛い」

無理矢理におし広げて、もう1本入れられた。

「くうう……」

今後は2本でこねくられた。痛いんだけど、片っぱしから痛みが散っていくみたいな感じで、だから目茶苦茶には痛くない。

「これくらいで良からう」

オレは、ほっとした。やめてくれるんだと思った。

「3本まで拡張しては、すんなり入りすぎて面白くないからの」

おい、それって……?

若オヤジが、指をぬいた。立ち上がる気配。

なんだ、やっぱりやめるんじゃないか。

そのしゅんかんまで、オレは『エッチ』の本当の意味を知らなかったんだ。

若オヤジが真後ろに立って、オレのこしを両手でつかんで……

え……?

太くてやわらかっぱいけど固くて熱い物が、しりの穴におしつけられた。ぐううっと、ついてくる。しりの穴にひどい異和感が広がって……

「痛い! やめろ……やめてください!」

びきびきと痛みが走った。あっ……若オヤジが何をしようとしてるのか、オレが何をされてるのが、やっと分かった。しりの穴にチンチンをつっこもうとしてやがる!

「やめろ! 気でもくるったのか?! そんなこと……ぎひひひっ!」

めりめりと穴を引きさいて(それくらいに感じた)、固くて熱いチンチンがおし入ってき

た。

「痛い！ 熱い！ やだ！ やめろよおおお……！」

ほんのちょっとだけ、痛みがうすれた。それは、若オヤジの腹がオレのしりにつき当たって、それ以上はチンチンを入れられなくなっただけのことだった。

内臓がおし上げられて、それは痛いんじゃないけど、すごく気色悪い。

「お願いします。もう、やめてください。許してください」

すこしだけ気持ちが落ち着いたので、ていねいな言葉使いでお願いした。

「終わったら、やめてやる」

なんだよ、それ？

「まずはケツマンコをいただいたが。オンタイもお待ちかねだぞ」

若オヤジはオレにおおいかぶさってきて、かたをつかんでオレを引き起こした。オレよりも大きく足を開いて座る若オヤジのこしに乘せられた。

ずるっとしりがすべりかけて、でもチンチンが穴にはまってるから、ますますこねられる。痛い。

若オヤジが両手でわきの下をがっちりつかんで、

じじいが正面に立ちはだかって、チンチンをオレのくちびるにおしつけてきた。顔をそむけても、かみの毛をつかんで正面にもどされる。

「ほら、あーん」

さっきはでろんと垂れていたチンチンが、水平くらいまで起きている。マーブルチョコのつつよりも太くなってる。

「さっさとくわえて差し上げろ」

下からゆすぶられた。痛みもゆすぶられる。

「あうっ……」

半開きになった口に、ちんちんがおしこまれた。

うえええ……ばっちい。きゅろんとした舌ざわりだ。むわあっとした熱気が鼻をつく。

ねっとりした、これまでにないことのないにおい。『男くささ』っていうけど、これがそうなのかな。

「かむんじゃないぞ。歯を立てたら……」

「電激棒が効きますよ」

ジュニアが入れ知えをする。

「クリトリスへの通電で、こいつは一発で降参しましたからね」

「それは、どのメスでも同じだぞ」

オーナーも、くそお、面白そうに言いやる。

「こんなこともあろうかと、ちゃんと準備してあるぞ」

ドクターがそれっぽいことを言いながら、ソファの後ろから本当に電激棒を取り出しやがった。いやだ。あれだけは絶対的にイヤだ。しりへの電激くらいなら、相打ち覚悟でチンチンにかみついてやるけど、マンマンのクリだけは、絶対的にイヤだ。

オレは大きく口を開けた。

「かむなどとは言ったが、バカみたいに開けるとはいっくらん。口は閉じて、チンポにしゃぶりつけ」

やだよ……でも、やらない電激だよな。

「もっとすばめて。舌もチンポにからめるんじゃ」

うえええ……はき気がしてくる。

じじいがこしをうごかして、チンポを半分くらい引きぬいたり、またおしこんだりし始めた。

「んゝむゝうゝ……」

ますますはき気がつのる。

口の中で、チンチンが太く固くなっていく。これ、ボッキていうんだろ。自分でいじったりエッチなことをするとそうなるって、黄世音ちゃんが言ってたな。

「まゝもゝっつ……むゝみゝいゝいゝっ！？」

下からもつき上げられて、全身をゆすぶられる。しりの穴のチンチンが出たり入ったりして、そのたびに激痛もゆすぶられる。

「も`お`お`お`っ……お`わ`あ`あ`あ`……！」

痛い！ 熱い！ 苦しい！

なんだって、こんなに、オレのこと、いじめるんだよ？！

大のオトナが小っちゃい女の子をいじめて、楽しいのかよ？

「あらあら、かわいそうね。こうすれば楽になるかな？」

ミャナさんが横からにじり寄って来た。身をかがめて、じじいとオレとの間に半身を入れた。

「うおほほ。金玉がかみの毛にこすられて、こりゃたまらんわい」

実きょう解説なんざ要らねえよ。

「ん`に`やつ`……」

乳首をつままれて、気持ちの良い電気が走った。上は極楽、下は大火事……くそ、今どき五エ門ぶろなんか、ねえぞ。

痛くて熱いのと気持ち良い電気とで、頭が混乱する。

「む`お`お`お`……む`う`う`う`……」

頭までゆすぶられ始めた。チンチンがのどのおくまでつつこまれて、いっそうはき気がつのる。

大あらしの海でもみくちやにされてる小船の気分だ。

脳しんとうを起こすくらい激しくゆすぶられて、しりの穴がずたずたにさけるくらい乱暴につかれて……不意に、のどのおくに何かがたたきつけられた。

「んんっっ……？！」

「ゴクンせい。はき出すな」

頭をおさえつけられてて、チンチンが口いっぱいにあふれてるのに、はき出せるかよ。でも、これオシッコだろ。飲むなんて、やだよ。

「ほら、ゴックンしなさい。マスターの神聖な子種なのよ」

ミヤナさんまで、そんなことを言う。だけじゃなく、のどをくすぐる。

「はき出したら電激だぞ」

くそお。飲めばいいんだろ。

すげえトロ味があって、ちょっと苦いかな。のどにからまる。必死にツバを貯めて……

その間も、下からゆすぶられてる。そのショックで飲みこんじまった。

「後始末までさせてやりたいところじゃが、あんたにゆずろう。存分に楽しみなさい」

「いや、ぼくも寸前です」

またおしたおされて、かたとひじの四つんばいにされて——若オヤジはオレにのしかかって、いっそう激しい勢いでチンチンを出し入れして。びくびくっとこしをふるわせて。

ばたっと動きを止めた。

「ふうう。ガキのアナルは、とんでもない閉めつけた」

そんなことをつぶやきながら、やっとチンチンをぬいてくれた。でも、終わりじゃなかった。

オレをアグラ座りにもどすと、前にまわって、ななめ下に向いてるチンチンをオレの口元に近づけた。

「なめてきれいにしろ」

うげえ……じじいのチンチンより、もっといやだ。だって、しりの穴に入ってたんだぞ。いくら事前にシャワー完腸で中を洗ってるといっても、ばっちい。検のような紙コップをきれいに洗ったからといって、それで水を飲めるかよ。

「ジュニア。電激棒は、どういうふうに使うのですか？」

やめろ！ やめてくれよ！

ジュニアが電激棒を持って、若オヤジのとなりに並んだ。Y字形のふたまたを縦にして、クリに近づけた。

「やだ！ やめて……言うことを聞くから」

おれは顔をつき出して、チンチンをくわえた。

「ふふふ。魔法のツエですね」

「みいっ……?!」

クリにつめたい感覚があった。針がふれて……でも、電激はなかった。マンマンもくすぐったい。ふたまたの一方が、ぬい閉じられた筋にもぐりこんでくる。

「素直になったほうびをあげよう」

ちちちちちっと、クリがふるえた。

「んんんんんっ……!」

なんだよ、これ?

マンマン全体が暴発するようなショックが来ると覚悟（出来るもんか!）してたら、こしがくだけるような気持ち良さがつらぬいた。気持ち良さなんて言葉じゃ追いつかない。あまくてするどくてしびれて……自分でクリをさわるとオシッコをチビりそうになるけど、その100万倍もすごいとしか、言い表わせない。

続けられたら、絶対にオシッコをチビってた。でも、いっしゅんだけだった。

「ちゃんとおそうじフェラを出来たら、もっとほうびをあげるよ」

やだよ。チビりたくない。なんて頭では思うくせに、オレはチンチンを根元までくわえこんで、若オヤジに命じられた通りに舌でペロペロした。とくに変な味はしないけど、オシッコの出るホースをなめてるなんて、すごくばっちい。

「よし、初めてにしては上手だぞ」

頭をなでられた。こんなの、上手も下手もあるもんかよ。

「カリクビのあたりをくわえて、中に残っているシルも吸い出せ」

カリクビ? もっと先っぽの……ああ、ここに段がついてる。首なんだから、その下かな。でも、吸い出すって……

チュウウウウ……うええ! 先っぽからなんかどろっとしたのが出てきた。舌にからまって、えぐい味がする。でも、これも飲みこまなきゃいけないんだろうな。

「よし、合格だ」

また、頭をなでられた。ほめてのばす調教ってやつかな。

若オヤジが後ろへ下がった。口が空っぽになって、おれはひと息もふた息もついた。

「それじゃ、約束通りにほうびをあげよう」

ジュニアが、また電激棒をクリに当てた。

「クリイキさせるんじゃないぞ」

オーナーに声をかけられて、ジュニアがかたをすくめた。

「先に味を覚えられると、ナカイキを教えるのが難しいっていうんだろ。まちがってると思うけどな」

「とにかく、特別賛助会員様のご要望だ。処女のまま、クリイキも知らないガキを従順な性奴隷に調教してみせようじゃないか」

「へいへい」

ジュニアはいったん電激棒をオレからはなして——チキキと、グリップの根元を回した。

目の前で操作するのを見せられて、ダイヤルが二重になっているのが分かった。きっと、ひとつが痛いやつで、もひとつの方が気持ち良いやつだ。

「低周波の10で良いかな？ さっきのは5だったけど」

オーナーがうなずいた。

ジュニアが、あらためて電激棒の先をクリに当てた。ふたまたのもう一方はさっきと同じで、ぬい閉じられた筋にもぐりこんだ。

ビリリリリッと、さっきよりも激しくクリがふるえた。

「うあああああつ……あああ！」

さっきの何倍もすさまじい大波がこし全体をふるわせた。でも、数秒だけで電激棒はにげてしまった。

「あああ……も……」

もっと続けてくださいって言いかけて、オレは口を閉ざした。このあまいしびれは、す

ごくいけないことだと、そう思ったからだった。アメとムチ、北風と太陽だぜ。電激におびえて、あまいしびれに従う。そんなふうにはなりたくない。でも、クリへの電激だけは絶っつっつっ対にイヤだ。

どうすればいいんだよ？

考えこんでいる時間なんかなかった。

「それじゃ、逆親子ドンブリの時間だな」

ジュニアが、また訳の分らないことを言った。

「わしもオンタイほどの年ではないが、まあ、イラマチオが無難かな」

「レズリーのときは、ぼくが口だったしね」

この会話で察してしまった。また、口としりにチンチンをつっこまれるんだ。しかも親子で。

「同じ体位じゃ面白くないな」

ジュニアは、オレの足のナワをほどいてくれた。でも、手まではほどいてくれない。

「立ってごらん」

足がしびれてるし、足元はベッドでふにふになるので、しりもちをついて、後ろへひっくり返ってジタバタして——3回目で、やっと立ち上がった。葉葉ちゃんや黄世音ちゃんが見てたら、「はしたない」とか「もっと、おしとやかに」とか言うだろうけど、ムチの方の電激棒がひかえてるんだぞ。はずかしいなんて、思うどころじゃなかった。

ジュニアがバスローブとパンツをぬいで、ね転がった。チンチンがそっくり返って、腹にはりついてる。

「背中を向けて、ぼくをまたげ」

？？だけど、言われた通りにした。

ジュニアがチンチンを左手でにぎって、垂直に立てた。

「そこでスクワットをして、自分でケツマンコにはめるんだ」

な……そんなこと、出来るかよ。

前言てっ回。オーナーが電激棒を持って、オレの正面に立った。あっちの方が背が高いしカップクがあるし。すげえ位圧される。

「……！」

電激棒が乳首につきつけられた。

「ここには、まだ食らってないな。味わってみるか？ 低周波でなく高電圧の方だぞ」

高電圧てのが痛い方だな。クリよりは痛くないかもしれないけど、乳首もプチトマトも、柱の角でこすっただけで、息がつまるくらい痛いんだ。

「やるよ。やれば、いいんだろ」

腹立たしい。おどしに降参した自分が情けない。でも、反向したところで、電激を食らわされて、さっきと同じように力ずくで入れられるだけだ。

オレは上体を前へかたむけてバランスを取りながら、ひざを曲げていった。

チンチンの正確な位置をのぞきこもうとすると、つんのめって転げそうになる。大体の見当でしゃがんだら、しりの穴にぴったりとチンチンの先が当たった。ジュニアからは見えているから、調節してくれたのかな。

さらにひざを曲げ……痛い。自分で自分に痛いことをするなんて、無理だ。

「そら、もうひと息だ」

ぐぐぐ……と、心では思っても、ひざが動かない。

ずっと、電激棒が乳首に近づく。

「ひっ……」

反射的にのけぞって……しりを後ろにつき出した姿勢だぞ。重心を失って。

ずぐううっと、チンチンがつき差さってきた。

「ぎゃあああっつ……！」

ジュニアの腹の上にしりもちをついた。転びかけたのはジュニアが背中を支えてくれたけど。根元までずっぽりとチンチンが入っちまった。さっき入れられたときよりも痛い。

「やれば出来るじゃないか」

背中をおしもどしてくれて、激痛がちょびっとだけやわらいだ。でも、感謝なんかしないぞ。

「そら。スクワットをするんだよ」

ううう……オニ、アクマ、人非人。

激痛をこらえるだけで精いっぱいなのに。でも、電激棒をつきつけられたら、やるしかない。

ひざをのばすのは、なんとか出来た。激痛が減りはしないけど、にゆるうんとチンチンが出ていく手応え（じゃなくて、しり穴ざわり？）は安心につながる。でも、ぬけ切る前にこしをつかんで止められた。

「はい、ダウン」

人力2輪馬車のときも、レフトとかライトとか英語を使ってたな。コーチがアメリカ人だからかな。なんてことをちらっと考えるくらいには、オレも落ち着きを取りもどしていた。

ので。出すときにはいきむんだから、そこへ入れるときにはリラックスしたら良いかなと、ひらめいた——ら、活約筋だけでなくひざまでリラックスしちゃって、またストンとしりもち。

「ぐえ……」

ジュニアがうめいた。ざま見ろってんだ。

オレの方は、そんなに痛くなかった。チンチンを出し入れするコツを覚えた。思い出してみりゃ、1週間ちかくお通じがなかったときなんか、このチンチンくらいの太さのウンコが出たことだってあるしな。オトメのメイヨにかけて言っとくけど、そんなのは1回きりだぞ。だから覚えてるんだ。

腹に力を入れてひざをのばし、とにかく力をぬいてしりもちをつく。のを2回くり返したら、ジュニアにまたぐらをおさえられた。

「いい加減にしろ。ふざけていると、おまえがつらくなるだけだぞ」

指先で割れ目を探られて、ぬい閉じている糸の結び目をつままれた。

「そら、アップ……」

引っ張られると、カミソリで切りさかれるような痛みが走った。ひざをのばしてしりをうかすと、痛みが小さくなる。さっきみたいに勢い良くひざを曲げるとどうなるか、まさしく痛いほど理解できた。

「そら、ダウン」

下へ引っ張られて、ふん張りながらそろっとひざを曲げていった。つい活約筋も閉めてしまうので、そっちも痛くて熱い。でも、すこしは力をぬけてるんだろう。悲鳴をあげるほどの痛みじゃなかった。

2度3度4度5度と、スクワットをくり返させられた。

オーナーがバスローブの前をはだけてパンツをずり下げて——手で支えないのになめ上向きになってるチンチンを、オレの口元へつきつけた。

じじいにやらされたときとはちがって、チンチンを観察する余裕が、オレにはあった。

ずどーんと、マーブルチョコのつつの3割増しくらいのがつき出でて、先っぽは半丸のカップですくうアイスクリームみたいで、ふちがつつからはみ出でて(カリクビってのは、このことだな)、半丸のてっぺんにオシッコの出る穴が、おちょぼ口みたいだ。つつの根元は、もじゃもじゃのちりちりの毛にうもれてる。つつの下にしがみついている丸ごとのクルミみたいのが金玉ぶくろだな。寒いと縮かむって男子が言ってるのを聞いたことがあるけど、6月でも夜だしはだかだし、寒いんかな。オレは全身がカッカと熱いけど、悪寒もしてる。

ええい、もう。毒を食らわば皿まで。あーん、ぱく。

「口を動かせ。サオをなめたり、カリクビをあまがみしたり、忘れたのか？」

注文の多い料理店だな。料理されるのがオレだってとこまで同じだ。だけど、くそ、オレだって食べてやる。変な形で負けん気がよみがえってきた。

あむあむ、ぺろぺろ。そうだ、さっさと吸い出してやれば終わりにしてくれるかな。ず

ちゅううう。

「そんなんじゃ出ないぞ」

読まれてる。

「カリクビにくちびるを当てて息を吸いこむんだ。息をふき出してブウウと鳴らせるな。  
あれの逆だ」

「それは良いが、スクワットが止まっているよ」

ジュニアにペチンとしりをたたかれて、くっしん運動を再開——しながら、オーナーの  
命令も実行する。左手で円、右手で四角を書くよりは簡単だ。

んしょんしょんしょ……ちゅぶう`う`う`……

スクワットのせいで頭も上下するから、口の中でチンチンが暴れる。

「うおほほほ……」

思っ切し喜んでやがる。

「バカのひとつ覚えみたいにバキュームばかりじゃラチが明かんぞ。舌も動かせ」

左手で円、右手で四角、足で三角かよ。

んしょんしょんしょ……ちゅぶう`う`う`れろれろれろ……

うわ！ ちょ……

ジュニアがこしを動かし始めた。スクワットと逆に上下させたり、前後左右にこねくつ  
たり。

オーナーも、じじいみたいにオレの頭をつかんでゆすぶり始めた。上は暴風、下は大波  
だ。痛いし気分が悪い。

また、とつぜんに、のどのおくにどろっとしたオシッコ（ミャナさんは子種って言って  
たっけ）をたたきつけられた。わーってる。ゴックンだろ。

オーナーがチンチンをぬいてくれた。

「よし、ぼくもラストスパートだ」

ジュニアが身体を起こして、オレをおしたおした。こしを持ち上げて、ひざとかたの四つ

んばいにさせた。両足をそろえてるだけ、ザゼンのときよりもしりを高くつき上げた形になった。でも、足を閉じてるから、前よりもはずかしくは……いっしょだよ！

ジュニアがおおいかぶさってきて。

パンパンパン……

オレのしりにこしを激しく打ちつける。

「あぐっ……」

内臓をつき上げられて、息がつまる。目茶苦茶に痛くて熱い。

でも、つらい時間はすぐに終わった。

ぶるると、ジュニアはこしをふるわせて。

「ふうう……」

満足ぼいため息をはくと、チンチンをぬいてくれた。

終わった……んかな？ ドクターは、オレがケガをしたときの用心——じゃなかった。

「オンタイ。こいつでモミジ合わせはできんでしょうかね？」

「おいおいおい……」

じじいが苦笑した。

「なんと古風な。わしでさえ、パイズリと言うぞ。しかも、耳カキで飯をよそりたいとな」

じじいが新しいナワを持って、ベッドの横に立った。

「ここへこしかける」

オレは後ろ手にしばられたまま、のそのそと身体を起こして、ベッドのふちにこしかけた。

胸の上下を巻いているナワに、新しいナワが追加された。これまでのより白くて細くてやわらかい。

半割りのプチトマトをつまんで内側へ引っ張って（痛いってば）、元にもどらないように追加のナワで上下のナワを縦にしばった。その縦ナワにも水平にナワを通して、上下からもはさみつけた。思い切り内側へ寄ったところに、半割りのスモモ——はっきりオッパイ

と呼べる盛り上がりが作られた。

三方からナワに閉めつけられてるけど、そんなには痛くない。昨日からたて続けに激痛なことばかりされて、神経がマヒしちやってるのかな。

「ふうむ。無理っぽいかな」

つぶやきながらドクターはチンチンを垂直に立てて、スモモとスモモの間におしつけてきた。「生熱い」て日本語はないかもしれないけど、そんな感じ。

「痛い……」

ドクターのやつ、両手を『小さく前へ習え』みたいにして、指の先でスモモをさらに内側へ寄せようとする。チンチンを強引にスモモにはさませて、こしをヘコヘコ上下にゆすった。スモモがチンチンにこすられる。

これって、マンマンはいじられてないけど、エッチなことをされてるんじゃないだろうか。エッチなことをされるのが、なぜいけないのか、実はオレには良く分かってない。でも、気色悪くてばっちいのは分かる。それと、エッチなことをされて、親や先生にしかられるのは、たいがい女の子の方だ。ここには先生が居ないし、親は……オレをここへ放りこんだ張本人じゃないか！

「ううむ。モミジ合わせどころか、貝合わせにもならん」

「いやははは……」

オーナーが苦笑いしてる。

「貝合わせの意味は分かって、ひねっておるんじゃないろうが。みやびな伝統をおちよくられるのは好かん」

「いや、申し訳ないです。しかし、貝合わせからカブト合わせまで連想して、面白いことを思いつきましたよ」

「……とは？」

「つまりですな……」

ドクターがスモモ（くそ、せめてミカンなら、堂々とオッパイで言えるのに）から手を

放した。ちょっとこしを引いて、チンチンを片手で水平に構え直して——先っぽを乳首におしつけてきた。

「……？」

にゅるんと、生温かい感覚に乳首が包まれた。く、くすぐったい。

ああっ……？！

乳首がチンチンの先っぽに、めりこんでる。じゃなくて、オシッコの出る穴にはまりこんでる。

チンチンをひねって乳首をくすぐったり、細かく左右にふるわせて……ちっちゃな舌でなめられてるみたいなの。

5分くらいは続いたけど。

「しょせんは、お遊びだな。ほら、口を開けろ」

結局は口にチンチンをつっこまれた。今度はベッドにこしかけていたから、すこしは楽だった。そういう問題じゃない。

「もう要領は分かっているな。自分で動け」

それって、オレが頭をゆすってチンチンを出し入れしなくちゃならない。されるよりも出す方が、しんどいはずかしい。けど、やらなきゃ電激だ。

あむあむ、ぺろぺろ、んしょんしょ、ちろちろ、ずちゅうう……

じじいよりもオーナーよりも早く、1分くらいで、子種のおシッコを出してくれた。

「いやあ、乳首の逆レイプは前技としては有効ですな。しゅん殺されました」

なんか言い訳っぽい。何を言い訳してるのかが、オレには分からないけど。他の4人は分かてるな。ニヤニヤしてる。

5人が全員、オレの中に白いどろっとしたおシッコを出して、それでやっと許してもらえた。

手のナワもほどいてもらって、真っ先にオレがしたのは、しりの穴がさけていないかの確認だった。指先にちょこっと血が着いてきたけど、とくに痛いところはなかった。太い

チンチンを無理矢理に入れられて、穴全体がずきずきしているのはケガじゃねえよな。

それよりも。ぬい目の糸を引っ張られて、そっちの方が傷ついていた。痛いし血もにじんでる。

「実に大たんというか、当てつけがましいの。物足りずに、自分でいじっておる」

「そうですね。明日はスタッフにもおすそ分けしてあげましょうか」

スタッフてのは、『表』の牧場で働いている2人の男の人のことだ。こいつらもグルだったんだな。

5人の会話は半分以上が理解できなかったけど。

ドクターがその場で、しりの穴とぬい閉じとをしん察して、オナロインをぬってくれて。馬ボウへもどされた。

なんかや言われたけど、合格点はもらえたんだろう。馬ボウまでの短い道のりの間、ジュニアはずっと、しりを優しくなでてくれてたものな。

背負いベルトを着けられて、おくのかべにつながれて。やっぱり、いろいろと打ちのめされてたんだろうな。ワラのベッドの中へ落ちて行くみたいにな、ねむってしまった。気絶したのかもしれない。でも、その前に。サクの上につるされてるバケツの水がなくなるまで、しつこくウガイをしたぞ。それでも、生ぐさい子種オシッコのにおいは消えてくれなかったけど。

## 本物子馬との共同生活

翌朝は、まだ他のみんなたちがねているうすくらしいうちから、ジュニアにたたき起こされた。ねぼけまなこで、まだじんじんしてるしりの穴に気を取られながら、外へ引き出されると。子馬が居た。背の高さがオレのかたくらいで、顔の位置はずっと高い。図体としては、オレの3倍以上かな。

「今日から、おまえのパートナーになるポニーだ。パパと呼べ。しっかり世話をしてやれよ」

へ……パートナー？ パパ??

ああ、そうかと思い当たった。みんなは自分の子馬のことを、ゴシュジンサマとかダーリンって呼んでたっけ。つまり、それって、オレたちをここへ送りこんだやつなことだな。

だんだん見えてきたぞ。オレだって、あいつのことが好きだからパパって呼んでたわけじゃない。ママのお願いだからだ。もしかしたら、他のみんなたちは、もっといやなんじゃないかな。だから、子馬をそう呼ばせることで、ていこうをなくさせようってコンタンだな。

くそ。思い通りにされるもんか。でも、元からパパと呼ぶのは陰悪というほどのことでもなかった——のは、3日前までだぞ。

「世話の仕方は、先ばいたちに教えてもらえ」

え……？

自分の考えにとらわれてて、聞いてなかった。

「世話をするにしても、馬をジュンチしないことにはな」

ジュンチって、なんだ？

「手を出せ」

角砂糖をみつつもらった。ええと……テレビで見たんだっけ。うろ覚えで、手の平にひとつ乗せて、子馬の顔の前に差し出してみた。

子馬は角砂糖を吸いこんでしまうんじゃないかってくらいスンスンとかいってから。パクッとかじりついた。

手の平全体をべろんとなめられた。くすぐったい。生温かい。でも、気色悪くはなかった。

かりこり、あむあむ、ごっくん。

「ブヒヒン」

かしこいな。あとふたつをにぎってる左手に鼻をすり寄せて、ぺろぺろなめて。もっとちょうだいと、おねだり。

か、可愛い！

手を開いて、ふたつともあげちゃった。

目の前に長い首がある。ので、空いてる右手でなでてみた。いやがるどころか、でかい身体をおしつけてくる。でも、おしたおすほどの力じゃない。

馬のなめらかな毛並みに腹をくすぐられて、ぞくぞくとなった。悪寒じゃないぞ。すごく気持ち良くて、心まで気持ち良くなって——難しい小説とかで使われてる「官能」ってやつだ。

「ハミを着けてやれ」

細い金属と革のバンドがややこしくこんがらがった物をわたされた。ハミって、サルグツワだろ。かわいそうだよ。でも、ジュニアには（だけでなく、だれにも）逆らえない。

細かく指図されながら、子馬にハミを着けた。正確には、ハミだけでなく鼻革とかノド革とか。一度に覚えきれない。要は、顔をガンジガラメにするんだ。でも、これって、テレビやサーカスの馬は、みんな着けてるな。てことは、オレもサルグツワに慣れなきゃならないんだろうか……て思ったのは、もちろん取り消すぞ。

ハミの両はしの輪っかにタヅナを着けて、出来上がり。

「タヅナを取って、そこら辺を引き回してみろ。基本的な調教は済んでいるから、おそれることはない」

とは言われても。オレの何倍もでかい生き物が、言うことを聞いて……くれた。ていうか、オレの動きに従ってくれた。

タヅナをおそろおそろ引っ張ると、たるむところまで近寄ってくれた。歩くと、付いてきてくれる。曲がると、引っ張らなくても曲がってくれる。

ただ。細かく指図するには英語を——オレが覚える必要がある。ま、ほとんどが知ってる英語だけだな。

前にも説明したように、オレが通ってた学校は、おそろしく先まで進んでる。2学期からは、進学後の予習が始まるくらい。英語なんて、4年生のときから習ってる。

Go ahead, Left, Right. なぜか止めるのは Stop でなくて、Dohow, doh, doh. ドウドウって、英語だったんか。

タヅナを引かなくても、かけ声だけで動いてくれる。草地を1周した後、ふっと疑問に思っ

「ライト」

左へ曲がってみた。ら、子馬は立ち止まって首だけをぐいっと右へ向けた。その勢いで、オレは引きずりたおされた。

ジュニアにしりをけ飛ばされた。

「馬をからかうんじゃない」

オレはその場に正座させられて、馬に対する態度をこんこんと説教された。

馬はじょう談を理解しない。まじめにやれ。人間の言葉を理解してるんじゃないくて、ひびきで判断している。

だから、言うことを聞かないからといって、やたらとしかったりたいたりするな。根気と愛情で接してやれ。

「おまえたちは言葉を理解できるんだから、命令に逆らったら電激棒なんて、軽い方だぞ」

変てこな理くつを聞かされたって、子馬よりもオレたちへのあつかいの方が非道いという事実は変わらないぜ。昨夜のことだって、男から性ドレイへの愛情表現だとか言い出したぜ。もう、聞いちゃいねえよ。

でも。オレがどうあつかわれようと、こんな可愛い子をいじめたりするもんか。

最後に、馬ボウへのつなぎ方を実習して、オレも馬ボウにつながれて。

そのころには、他のみんなも起きる時刻になって。

ジリリリリ……小さなベルの音で、馬がいっせいに目を覚ました。パートナーがねていたら、鼻先でつついて起こす。かしこいなあ。

「あら、あなたもパートナーをいただいたんだ」

真向いのメコさんが目ざとく……も、ねえよな。こんなでかいのが居たら、いやでも気づくな。

「なんて呼ぶことになったの？」

そんなこと、どうでもいいだろ。でも、向こう三げん両どなり——以前に、同病相あわれむじゃなくて、ポニー同士、性ドレイ同士だもんな。

「……パパだとさ」

「へええ。そうなんだ。で、どっちのパパなの？」

どっちの？

「お客様のパパなのか、血のつながってるパパなのかって質問。意味が分かるかな？」

「分かんねえよ。血はつながってないけど、母さんの……再こん相手だ。母さんは病気で死んじまってるけど」

ほんとと初こんだけど。そう言うと言明がややこしくなる。

「ふうん、そうかあ。でも、まあ、ホワイティーナよりはふつうかな。あの子のママって、生みの親だものね」

へ……？

文脈からすると。実の母親が、ホワイティさんをここへ入れて……ええと。レズビアンっていうやつかな？

「まあ、子馬のママはオスだけどね」

頭が混乱したので、たずねたいことは全部、ほっぴらかすことにした。

じきに全員が起きて。朝の日課が始まった。だれかが命令するんでもベルが鳴るんでもなく、決まりきった流れ。でも、流れにサオ差せばたたかれる。

タオルやブラシを持って。オレの馬ボウにも備えてあった。それぞれの子馬を連れて、昨日はとちゅうで引き返した道をずっとおくまで行くと、小川があった。

じょぼぼぼぼ……子馬を水に入れてやると、オレの子馬以外はオシッコを始めた。オレ

の子馬も、それを見習う。オレの子馬ってのも、いちいちめんどうだ。パパでいいや。あいつのことは……考えたくもない。

それにしても。馬のチンチンって、でけえな。オシッコのときに、腹の中からによるんってのびてきて、オトナの男の2倍以上だ。オシッコだから、ポッキしてないよな。ポッキしたら、どんだけ化け物になるんだろ。

うわ……子馬のオシッコが終わったら。みんな足を開いて、立ったままオシッコを始めた。

「わたしたちは、ポニーでドンキーでしょ。だから、ハイセツは立ったままでしなくちゃいけないの。トジマンコも早く慣れなさい」

オレが目をまん丸口をあぐりしてたら、ミヤナさんにさとされた。でも、みんな横になってねむってるじゃないか。馬なら立ったままだろ。それに、馬ボウでバケツにするときもしゃがんでるぞ。というのは、言わずにおいといて。

赤信号、みんなでわたればこわくない。立ちションってのに、興味があったし。

ちょろろろ……くそう。割れ目の下の小さなスキマしか明いてないから、内ももに伝って気色悪いや。終わったらすぐにしゃがんで……ぬい目にふれるとまだ痛いかもしれないので、そおおおっと指1本で洗った。

中ごしでしりを後ろへつき出して、ボトト（疑音表現にとどめとく）してる人もいる。さいわいに(?) オレは、昨夜さんざんに完腸されてるから、したくはない。

メコさんは川岸にこしかけて、シカップさんは小川の中でガニマタになって、ちょこつと黒ずんでる部分にカミソリを当ててる。そういや、ジャパちゃんもその部分に黒いポツポツがあるな。もうちょつとのびたらそるんだろうな。

それからしばらくは、子馬の洗体。ブラシをぬらして、身体をこすってやる。逆なですると、いやがる。あまり遠りよすると、自分からブラシに身体をおしつけてくる。毛並みにそって強めにこすってやると、ブルルって気持ちよさそうに鼻を鳴らす。

チンチンとかしりは、自然と清潔を保つ仕組になってるから、よごれが目立っていなけ

れば洗ってやらなくて良いそうだ。人間よりも便利だ。

「もちろん、ペニスで遊んだりしちゃダメよ」

だれがするもんか。

子馬をきれいにしたら、自分の番。同じブラシで、子馬だったら不満に思うくらいに、そっと洗う。それでも痛いぞ。

バスタオルはブラシと逆で、自分の後で子馬をふいてやる。

終わったら、タヅナを引いて馬ボウへ帰る。タヅナは持たなくてもついて来るけど、引いてやった方が安心するんだってさ。

そして、おとなしくエサの時間を子馬もオレたちも待って。エサやりの手順も、あらためてミャナさんに指導してもらった。何がいちばん難しかったかというと。

「パパ、ご飯だよ。先に食ってね」

ものすごく異和感がある。それと、可愛い子馬とにくい男とをいっしょくたにするのも、不本意はなはだしいや。

子馬が食べ始めたら、自分へのエサやり。こっちは、教わる必要なんかないぞ。自分でエサって言ってりゃ世話ないな。残飯ぼいっていうか、混合飼料っていうか。今朝のエサは、野菜だらけでコンソメスープ味の、おかゆとたきこみご飯の中間だった。

## ジョッキーの訓練風景

食事が終わってひと休みすると、調教が始まる。

オレは、また乳首に目玉クリップで引き出されて。草地を囲む木の下に立たされた。目玉クリップのヒモを高い枝に結び付けられたので、直立不動で見学するつきやなかった。

調教のために集まっているのは、マスターが3人（オンタイじいも若オヤジも居なかった）とコーチと、もっぱらオレの世話係（？）になってるジュニア。みんなTシャツと

半パンだけど、コーチだけはカウボーイぽいボウシをかぶってる。

それと、オレの3倍はでかい子馬よりも、さらにひと回り半はでかい馬が2頭。

パパ以外の5頭も、女の子といっしょ。その背中にクラが乗せられた。アブミも付いてるけど、そこに座れるかよって大きさ（小ささ）と形をしていた。

カマボコ板4枚分ほどの、子馬の背中にフィットしたカーブに作られている。その真中に、どう見たってボッキしたチンチンのような棒が垂直に立っている。

そういう支度をせさせとしたのは、コーチとジュニアだけ。3人のマスターたちは、ぶらぶらと見物してるだけだった。

子馬の支度が調うと、5人はふみ台を使って子馬に……乗るのに苦労している。子馬の首にしがみつくようにして背中をまたいで、そろそろと乗り移っていく。クラの上の模造チンチンをマンマンに入れていく。

「くうう……」

「あつ、ああん……」

「*Filling...comming...*」

ミヤナさんだけは、模造チンチンが2本。なのに、他の（1本だけの）子よりも、すんなりと座った。

アブミには足をかけているけど、ひざがほとんど曲がっていない。あれじゃ、ふん張っても模造チンチンはぬけないな。

コーチとジュニアが、でかい馬にヒラリと乗った。右手に長いしなやかなムチを持っている。

2頭のオトナ馬に友導されて、5頭の子馬が1列に並んだ。

「*Trot in single file!*」

コーチの号令で、ジュニアを先頭にしていっせいにかけ足——かな。西部劇や競馬の走り方じゃないけど、オレの持久走よりは速いな。

ジュニアはアブミで馬の腹をけったり、タツナを使って馬を操ってるけど、女の子5人

は乗せてもらってる感がある。子馬だって、オトナ馬に従ってるだけじゃないかな。

フェンスに沿って1周すると。すこしはなれた位置を保って6頭を追いかけていたコーチがさげんだ。

「*Formation change to a line!*」

走りながら横隊に組み変えて——デコボコ横隊だ。乗り手の動きがバラバラなもの、よく分かる。

シカップさんは、背筋をのばして格好エロい。なんたってすっぱだかだもの。ジャパちゃん和ティーナさんは子馬の首筋にしがみついて、ふり落とされないようにがんばってる。メコさんは足をつつ張って模造チンチンに逆らってる。ミャナさんは、ひざをくっしんして身体を上下にゆらしている。そのたびに模造チンチンが出入りするの見える。

横隊で1周すると、いったん止まって。2列縦隊に並び変えて。今度はジグザグに走り出した。左の列が、ジュニア、シカップ、ミャナの並び順。右はメコ、ジャパ、ティーナ。

「*Go ahead!*」

左の縦隊は、まあまあ足並みもそろってる。

「*Scissors!*」

ジュニアが馬を正面に向けたまま、右ななめへ動いた。メコさんの馬が左ななめへ動いて、ジュニアの後ろをすりぬけた。その後ろをシカップさんが右ななめにすりぬけて。2人とも馬が進行方向へ身体の向きを変えたから、ジュニアみたいにすぐには直進にもどれなくて、進路が広がった。シカップさんにふた呼吸くらいおくれてジャパちゃんが左ななめへ動いて……ミャナさんにぶつかりそうになった。ところへティーナさんもつかけてきて……3頭の子馬はぶつかる直前で止まった。

「バカモノ。ウマニ、アイズスルゾ」

パチイン！　パチイン！　パチイン！

コーチが追いついて来て、お見合いをしている3人のこしをムチで順番にたたいた。

3人ともビクッと身体をふるわせたけど、悲鳴はなかった。電激に比べたら、なでられ

たようなものなんだろう。

「ウマニマカセル、ナイ。タヅナハダメ。タイジュウイドウ、アブミデアイズ。クチヲスパクシテ、オシエタゾ」

うんうんとうなずいてるのは、ミャナさんだけ。

シカップさんとメコさんは、ふてくされたっぽい表情。体重移動って、つまりは自分で模造チンチンをこねくる結果になるものな。やりたくないだろうな。

ジャパちゃんとティーナさんは、ぼかんとしてるだけ。でも、ティーナさんが英語で質問して、英語で教わって、理解したっぽい。それを聞いてたジャパちゃんも、それっぽい表情になった。

3人のマスターたちは、つまらなさそうに見物している。

オレは不安がいっぱい。オレも、模造ペニスの生えたクラに乗らなきゃならないんだろうな。マンマンじゃなくて、しりの穴で。それはまだ良い（良くない!）としても。

みんなは、もう3か月も調教を受けている。人力馬車や荷車とちがって、乗馬は難しそうだ。

あ、いや。ポニーとかドンキーにされるのは簡単そうだなって、これっぽっちも思っていないぞ。でも、あれってパワーだけの問題だろ。積荷の量だって手加減してもらえようだし。乗馬はテクニックだから。パワーなら、3か月分の差は知れてるものな。筋肉が2倍になったりはしない。でも3か月どころか1か月で、カナヅチが100メートル完泳まで上達するんだぞ。

なんて考えてるうちに、分列行進の練習は中止になって、1頭ずつでななめ歩行の練習に変わってた。

ますます、見物の3人はつまらなさそうにしてる。

連中の目つきが変わったのは、2時間ちかい乗馬訓練が終わってからだった。

「キョウハ、タイヘンニ、フデキゾ。 *punishment* ネ」

子馬の横に立って、やたらとこしをもじつかせてる5人を、コーチがしかりつけた。

「イチバンノフデキ、ジャパユキン。3マスタータチニ、ムチヲイタダク」

「待ってください」

ミャナさんがジャパちゃんの前へ動いた。

「3人からムチだなんて、厳しすぎます。ジョッキーリーダーのわたしも連帯責任でバツを受けますから、ジャパユキンへのムチはひとりだけにしてやってください」

連帯責任でよりも、おさなくてキャシャな子をかばったんだと思う。オレは感動したんだけど、なんだかしっくりこない部分もあった。

コーチはかたをすくめて、3人をふり返った。

「ミナサン、ミャナカンツォーネノ *proposal* ウケルデスカ？」

「ババアに用はないね」

そのひと言に、他の2人もうなずいた。ので、ジャパちゃんがひとりで3人からムチ打たれることになったんだだけ。

「ミャナカンツォーネハ、オイドンガ *reward* アタエル。ソレデヨイナ？」

「ノー。それでは意味がありません。わたしはムチ打ちを望んだのではなく、ジャパユキンを救ってあげたいのです」

「ドレイハ *No* ユルスナイ。サカラウニハ *punishment* ネ」

ミャナさんも、それ以上は逆らわなかった。

2人は、オレの両どなりに生えている木の下にそれぞれ立たされて、両手をしばられて木の枝につながれた。ふたりとも、フェンスに向かって立っている。

3人のマスターがジャパちゃんを背後から半円に取り囲んで、コーチはミャナさんの後ろに立った。

「ミナサン、*bull-whip* ノ *operation* ミジユクネ。オイドン、オテホンシメスマシ」

輪っかにして持ってたムチをコーチがのぼした。長い。2メートルはある。

コーチはムチをはね上げて、ふり回した。

ひゅん、ひゅんん……新体操のリボンの演技みたいだ。

ひゅんん、パシッ！ パチン！

空中でムチを鳴らし、地面を打つてもっとするどい音を鳴らした。

マスターたちも真似をしようとするけど、空中でふり回すのにも四苦八苦。けど、コーチは指導しない。

「フリマウス、アタル。Roulette オナジネ」

コーチがミャナさんに向き直って、空間に半円をえがくようにふった。

ひゅんん、バッチイン！

「ああっ……」

ムチはしりを水平になぎはらった。

ミャナさんのかん高い声は、悲鳴というよりも感極まったさけびのように聞こえた。

「へい、アナタたち、ガンバルレ」

あざやかなムチさばきに見とれていたマスターたちが我に返って。

ふにょん、ペチ。

ふにやら、パチ。

うでを力いっぱいにつutterるんだけど、ムチの先っぽが置いてけぼりになって、それでも身体に当たればマシな方。1本は先に当たったムチにからまって、2人してたぐり寄せてほぐしてる。

ひゅんん、バッチイン！

ふにゃ、ペチン。

ペシ。ペチヨ。

何回もやってるうちに、さすがにムチらしい音になってきた。

しゅ、バチン！

「きゃあっ……」

しゅる、パアン！

「masaki!!」

ジャパちゃんのかたから太ももにかけて、うすい赤あざが散っていく。

ミャナさんの方は、しりにしか当たってない。真っ赤にはれて、むらさき色の長い筋が、水平に何本も刻まれている。身代わりになるよりも非道い目に会わされてる。

「*Hey, bitch.* コッチムクゾ」

「お願いします。オッパイとオマンコはたたかないでください」

半歩ずつ足をふみ代える感じで、ゆっくりと向き直った。

「ドレイノネガイ、ハンタイムキニカナエラレル」

ひゅううん、ズバッジイン！

肉をたたくすさまじい音がして、チブサがひしゃげて横へふっ飛んだ。

「きゃあああっ……！」

今度こそ、本物の悲鳴だった。

バックハンドでムチが反対側からたたきつけられて、ぶるるとチブサがふるえた。

「よし、おまえもこっちへ向け」

「*No!* アナタタチ、ドコアタルカ、ワカルナイ。ショウメン、ダメデス」

3人は、しぶしぶ従う。これまで以上にうでつぶしにヨリをかけて——ふり回しても、ムチが余計にしなるだけで、い力はへろへろペチペチ。

それに比べてコーチのムチは、空気を切りさいてミャナさんのはだに赤い線を刻んでいく。

「足ヲヒラケゾ」

ぱしゅん。またぐらすれすれでムチがはねて、空気を鳴らした。

「いやです。それだけは許してください」

なみだ声のうったえに、コーチはあっさりうなずいた。

「*OK* デハ、マスターフタリ、ジャパユキンノアシ、ヒラク。アナタ、ココニタツ」

「*Hindi. Mangyaring huminto*」

逆らっても、オトナ2人には敵わない。たちまち人の字形にされてしまった。

真後ろに立った男が、アンダースローでジャパちゃんのしりの間をねらってムチを送りこんで、うでをふり上げた。ムチの先っぽが、地面すれすれからはね上がって。

バチイン！

これまでのへろへろよりは勢いがあった。

「ぎゃああっつ……！」

ジャパちゃんの背中がそっくり返って、それからグテツとなった。

「やめて！ わたしをたたいて！」

ミャナさんが、大きく足を広げた。身体がしずんで、うでをつっている太い枝がたわんだ。

「OK.Sacrificeハ masochist ノヨロコビネ」

コーチもマスターと同じようにムチをふるった。けど、ずっと速く強く、ミャナさんの割れ目を打った——んじゃなく、食いこんだ。

「いぎっ、きゃああああっつ！」

ムチは先っぽから30センチくらいのところが当たって、そこから割れ目をえぐって走りぬけた。

「きひいいい……いいい……」

ミャナさんの細い悲鳴が、いつまでも続いた。またぐらをかばって足をくの字に折り曲げて、身体全体がかたむいている。

「モトノシセイニ、モドルシロ。ソレトモ、ジャパユキンタタイテアル」

コーチが、ジャパちゃんの真後ろに立っている男に向かってあごをしゃくった。

その男が、またアンダースローでジャパちゃんのまたぐらにムチを送りこんだ。

バッチイン！

「ぎゃわあゝあゝあゝっつ……！」

ジャパちゃんも、ミャナさんに負けずおとらずの絶きよう。

「やめて。ジャパユキンは、わたしほど慣れていません。いじめるなら、わたしを……ひ

いつ……?!」

コーチの放った不意打ちのムチは、割れ目すれすれで空を切って、パアンと派手な音を鳴らした。

「イジメル、チガウゾ。イイナオシ、スルゾ？」

「わたしを可愛がってください！」

ミャナさんが、やけくそめいた声をあげた。

「マゾのわたしを、うんと可愛がってください。ムチで、オマンコを切りさいてください。オッパイをずたずたにしてください……あああああ」

そういうふうと言わないと、ジャパちゃんを許してもらえないと判断したんだろう。

だけど。ミャナさんは、自分から希望して何回も入キュウしてるって、しょうかいされてたよな。ウソだと思ってたけど、本当だとしたら……マゾだサドだなんて、万才のネタくらいにしか思ってたけど。だとしたら、本心なのかな。オレには分からないや。

「Oイヨクゾイウ。マスターたち、ミャナカンツォーネヲ、カワイガルシテヤリナサイ」

でも、顔にムチが当たると危険だからと——コーチが、道具小屋から革バンドでつながった2枚の板を持って来た。ミャナさんの頭にバンドを巻くと、2枚の板が顔をはさんだ。

これ、テレビの競馬で見たことがある。オレも母さんも競馬なんて興味はなかったけど、パパは競馬用の馬を持っていて、まあテレビに映るほどのスターじゃないんだけど——んなこと、どうだっていい。

たしか、シャガンタイとかいう名前だっけ。馬によそ見をさせず競争に意識を集中させるんだ。コーチがミャナさんに着けたのは、ムチが顔に当たっても目を守るためだろう。目かくしをするか、いつそふくろでもかぶせておけば済むのにな。

ミャナさんがムチの集中放火を受ける準備が整うと、3人のマスターが3メートルくらい空けて、正面に並んだ。

「リョウガワハオッパイネラウ。ヒダリノヒト backhand レンシュウニナル」

コーチは、ジャパちゃんにも正面を向かせてムチを構えた。

「ミャナカンツォーネガ、アシヲトジル。オイドン、ジャパユキンノオーマンコ、ブッタ  
タク。ヨイナ？」

ミャナさんは無言で足を開いて、天をあおいだ。シャ眼帯でかくれているので、表情は  
分からない。

「OK...Cross fire!」

左右からチブサに向けてムチが泳いで（飛ぶほどじゃない）、地面をのたくったムチはと  
ちゅうでエンコして。

ぱしん、ぺちん。

ぷ、くくく……からまってやんの。

エンコしたムチは、ヘビみたいのにのたくって先っぽはミャナさんの足元まで達したけれ  
ど。うまくはねあげられなくて、空ぶり。

かくんと、ミャナさんが頭を垂れた。ガックシてやつだよな。

ここで初めて、コーチの指導が入った。3人がそれぞれに、素ぶりをくり返してから、  
仕切り直して。

ひゅん、パチイン。

ひょう、パチン。

しゅんん、ピチッ。

びっくりマークは要らないね。ミャナさんも、うめき声ひとつもらさない。びくとも反  
応しない。

「マスター、手加減なんかしないでください」

笑いをかみ殺してる。

なにおう、この小むすめが。3人とも、カッカきたみたい。

「リキンデハ、ダメデスネ。ドハツテンヨムチノセンタンニオクル、ソナ *feeling* デ  
ココロカケテクダサイ」

しゅうん、バチイン！

ぶん、ペチン。

しゅ、ペチン！

ムチのはだを打つ音が、するどくなった。

でもミャナさんは、まだがんばってる。

バッチン！ パアン！ ビチイッ！

バズンッ！ スカッ？ バシイン！

3発5発8発と、ムチのあらしがミャナさんにおそいかかった。

「あうっ……ぐっ……」

ちょこっとうめくだけで、ミャナさんは平然としている。両足は大きく開いたまま、ふんばっている。

バチイン！

「きゃああつ……へタクソ！」

バックハンドのムチが大きくそれて、シャ眼帯をたたいたんだ。

結局それが、3人のマスターにムチ打たれてミャナさんがさけんだゆいいつの悲鳴だった。

「うでがつかれる」

ミャナさんと並んでるオレから見て左側のマスターが、ムチを丸めて左手に持ち変えた。Tシャツにあせがにじんでる。ミャナさんには血がにじんでるけどな。

それで、パニッシュメント（チョウバツだよな）とリワード（て、何だ？）は、打ち切りになった。ジャパちゃんのほっとした表情は良く分かるけど、ミャナさんのふくれっ面は分からないや。

——午後は、昼のエサの後で馬ボウのそうじをする。

馬はオレたちとはちがって、用足しにバケツを使ったりしないから、よごれたワラを捨てて、新しいのを入れてやる。捨てるワラは、小屋の前の大きな箱へ入れておけば、『表』の牧場からやって来る人が処分してくれる。

そうじは30分とかからない。その後は、まったくさせられることがなくて、でも馬ボウにつながれてなくちゃならないから、自由時間じゃなくて不自由時間だった。例外はミヤナさん。お昼のエサやりは愛馬のゴシュジンサマだけで、本人はお昼ぬきにされた。乗馬訓練のときにジャパちゃんをかばって、それを反向と見なされたんだな。

バツはそれだけじゃなくて。馬ボウには時計がないので正確な時刻は分からないけど、午後2時過ぎかな。馬ボウのそうじが終わると、ひとりだけ引き出されて。夕方のエサやり直前に、昨夜の若オヤジとジュニアにふたりがかりで引きずられてもどって来た。全身にムチのミミズばれがびっしり。無事なのは顔と手足の裏だけ——というのは、ちょっとだけ大げさだけど。マンマンからは出血してたな。

それでも、ワラのベッドにぐったりと横たわったのは、ゴシュジンサマへのエサやりを（よたよたのろのろと）済ませてからだった。そのまま、暗くなるまで動かなかったけど、なんだかやわらかい表情、幸せそうに見えたのは——チョウバツの苦痛に顔をゆがめ過ぎて、表情筋がマヒしてたんだと思う。

そんなだから、夜になっても人間にもどされることもなかった。『お呼び』がかかったのは、オレ以外の4人だった。

「明日はトジマンコのワンマンショーだからな。とくに穴の方は万全のコンディションにしとけよ」

くやしいことに、ジュニアの言葉を理解してしまった。

——不安とおびえといかりと。

明日はどんな目に会われるんだろうか。

牧場が終わるという9月まで、こんなことが続くんだろうか。その後は、どうなるんだろうか。義理父のアイツに、エッチなこととかチョウバツとかを、ずっとされ続けるんかな。

そんな先のこともハラワタがにえてねじくり返るけれど。『調教』のことが、もっと不安だ。

人力馬車引きはオレにも出来そうだけど。しりの穴に鉄棒を入れて、それで荷車を引くなんて……出来っこない。模造チンチンの生えたクラに座って子馬に乗るなんて……いやだよ。

今夜は見のがしてもらえたけど、明日の夜は、また何人にも、口としりの穴にチンチンをつっこまれるんだろうな。いやだ、いやだ、いやだよおお。

まるきりねむれなかったのか、ねむりながら「ねむれないという悪夢」を見ていたのかも分からずにいるうちに、牧場にかん禁されて4日目の朝が明けた。

※続きは製品版でお楽しみください。